

**八尾市文化財調査報告 27
平成 4 年度国庫補助事業**

八尾市内遺跡平成 4 年度発掘調査報告書 I

1993. 3

八尾市教育委員会



正 誤 表

八尾市文化財調査報告27

頁	行	誤	正
3	15	(8)のみ	(7)のみ
6	6	(層厚18m)	(層厚18cm)
"	7	(層厚30m)	(層厚30cm)
"	10	(TP +5.6)	(TP +6.1)
"	"	(TP +5.3)	(TP +5.8)
34	7	(層厚20m)	(層厚20cm)
71	8	次の5つ	次の4つ

はじめに

大阪平野の東側、生駒山麓に位置する八尾市は、古代は河内潟に望み、豊かな山野を控えて、大和との交通の要衝として発達してきました。このことは、近年の発掘調査の多大な成果からも容易に伺うことができます。このようなまさに遺跡の宝庫ともいえる街であるだけに、開発事業にさきだつ、遺構確認調査がますます重要な意義をもってきております。本市ではこのような現状を踏まえ、文化財の調査、保存、啓発をすすめていくために、文化財室を文化財課として昇格させ、より一層の文化財保護行政の充実を計ってまいりました。

本書は平成4年度に行なった調査の結果をまとめたものであります。本書が学術研究の基礎資料として利用され、また、八尾市の貴重な埋蔵文化財を理解していただく一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、これらの調査にあたり、御協力と御理解を賜わりました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

八尾市教育委員会
教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成4年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財課（課長 田中弘）が主体となって実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財課の米田敏幸、潜斎、吉田野乃が担当し、調査にあたった。
4. 本書は巻末に記載した調査一覧表のなかで、特に成果のあった調査についてその概要を収録した。
5. 本書は作成にあたっては、潜、吉田が執筆・編集を行った。

本文目次

1. 木の本遺跡 (91-468)の調査	1
2. 久宝寺遺跡 (91-479)の調査	6
3. 高安古墳群 (91-562)の調査	8
4. 萱振遺跡 (92-006)の調査	22
5. 植松遺跡 (91-626, 627) の調査	26
6. 小阪合遺跡 (92-067)の調査	30
7. 小阪合遺跡 (92-110)の調査	34
8. 跡部遺跡 (92-121)の調査	37
9. 小阪合遺跡 (92-136)の調査	40
10. 小阪合遺跡 (92-143)の調査	42
11. 大竹西遺跡 (92-063)の調査	46
12. 竹渕遺跡 (92-145)の調査	53
13. 小阪合遺跡 (92-275)の調査	55
14. 萱振遺跡 (91-166)の調査	57
15. 恩智遺跡 (92-352)の調査	60
16. 跡部遺跡 (92-164)の調査	63
17. 中田遺跡 (92-467)の調査	76

図版目次

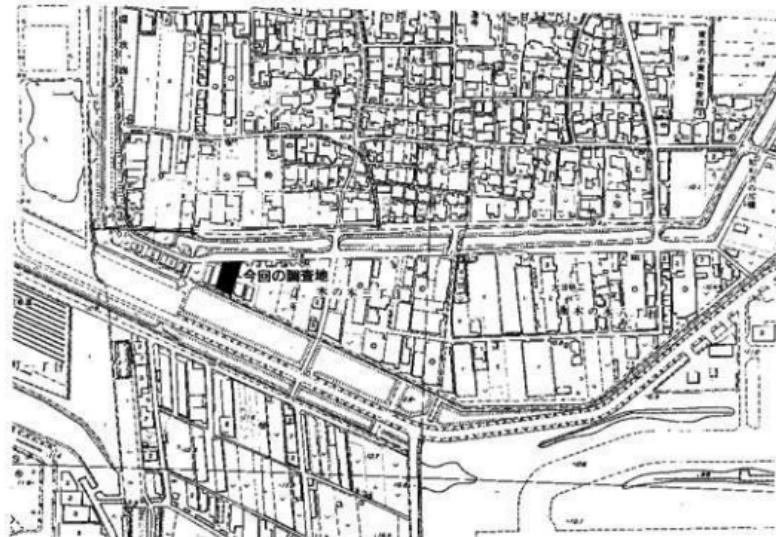
- 図版1 木の本遺跡 (91-468) 第1次調査 溝検出状況
図版2 高安古墳群 (91-562) 第2次調査 土坑状遺構断面
調査地全景 (東より)
図版3 高安古墳群 (91-562) 1号墳調査前全景 (南東より)
1号墳石室調査前 (北西より)
2号墳石室調査前 (北東より)
1号墳石室調査後 (南西より)
1号墳石室全景 (東より)
1号墳石室右側壁
石室周辺西側確認ピット
図版4 高安古墳群 (91-562) 1号墳北トレンチ
1号墳東トレンチ
直交トレンチ
直交トレンチ、1号墳南トレンチ
図版5 高安古墳群 (91-562) 2号墳石室全景 (北東より)
2号墳石室羨道部
2号墳東トレンチ
1号墳調査風景
近世 瓦導管
古墳時代 土坑
調査風景
図版6 高安古墳群 (91-562) 調査区全景 (東から)
図版7 高安古墳群 (91-562) 第1調査区 ピット1
第1調査区 溝内ピット
第2次調査
図版8 高安古墳群 (91-562) 第2次調査 ピット (断面)
第1調査区 溝
第2調査区 土坑
図版9 高安古墳群 (91-562)
図版10 葦振遺跡 (92-006)
図版11 葦振遺跡 (92-006)
小阪合遺跡 (92-067)
図版12 小阪合遺跡 (92-110)
図版13 小阪合遺跡 (92-143)
図版14 大竹西遺跡 (92-063)

- 図版15 跡部遺跡（92-164） 井戸
土器出土状況
- 図版16 跡部遺跡（92-164） S X - 0 1
木製品出土状況
- 図版17 木の本遺跡（91-468） 出土遺物
- 図版18 大竹西遺跡（92-063） 第2調査区 土坑出土遺物
- 図版19 跡部遺跡（92-164） 井戸出土遺物
- 図版20 跡部遺跡（92-164） 井戸出土遺物
- 図版21 跡部遺跡（92-164） 井戸出土遺物
- 図版22 跡部遺跡（92-164） 井戸出土遺物

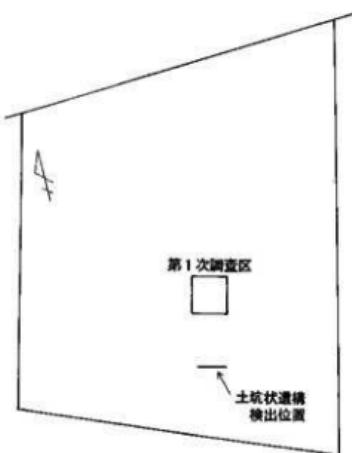
1. 木の本遺跡 (91-468)

1. 調査地 木の本3丁目44、45
2. 調査期間 平成3年1月13日、3月3日
3. 調査契機 工場建設
4. 調査方法 第1次調査は1月31日に事業計画地の中央付近に2.5×2.5mの調査区を設定し、重機と人力を併用してGL-2.6m前後までの調査を実施した。1次調査では古墳時代中期～後期の遺構が確認されたため、工事着手時に第2次調査を行った。
5. 位置と歴史環境 木の本遺跡は八尾市の南西部に位置しており、東に田井中遺跡、南に太田遺跡、西に八尾南遺跡・長原遺跡と接している。八尾南遺跡、長原遺跡、太田遺跡では旧石器が出土し、また縄文・弥生時代の住居跡が見つかっている。田井中遺跡でも弥生前期の遺構・遺物が出土しており、早くから開けた地域であったことが知られている。

当遺跡は昭和56年に周知の文化財包蔵地として認められて以来、当教



第1図 調査地周辺図 (1/5000)



第2図 調査位置図 (1/800)

育委員会と八尾市文化財調査研究会によって数次の発掘調査が行われ、弥生時代中期前半から古墳時代中期にいたる集落域が確認されている。また、八尾空港内で行われた調査では平安時代の条里遺構が検出しており、南木の本1丁目の調査でもやはり平安時代の遺物が多数出土している。

6. 調査概要

最初に第1次調査で検出した遺構について述べる。1次調査では古墳時代後期の水田面と溝2条を検出した。

遺構はGL - 1.2m前後の明灰色粘土上面で水田面を検出した。

調査区中央で畦畔状の高まりも確認できた。畦畔状の高まりは幅0.27m高さ0.08mで東西方向に伸びている。またベースとなる明灰色粘土上面では牛の足跡が見られた。時期は明灰色粘土出土遺物から古墳時代後期（6世紀末7世紀初頭）に比定できる。

そして、GL - 1.4m前後にある暗灰色粘質土は6世紀前葉～中葉とみられる遺物が多く出土したため、遺物包含層とみられる。層厚はおよそ0.3mを測る。しかし、この包含層は第2次調査でみられた土坑状遺構の埋土と類似しているため、遺構の埋土である可能性も考えられる。

この暗灰色粘質土の下部層の暗灰色粘性シルト上面では溝2条を検出している。南北方向に伸びる溝1は西側の肩のみ確認した。東側の肩は調

査区外におよぶため全容は不明だが最大検出幅は0.58mを測る。溝2は南東から北西に伸びており、幅約0.44mである。溝1、2ともに埋土は暗茶灰色粘砂。遺物は須恵器、土師器の破片が埋土より出土している。

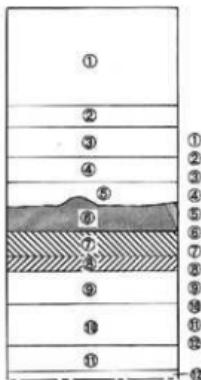
第2次調査は工事着手時に断面調査を実施し、第1次調査でもみられた包含層の確認と古墳時代の土坑状遺構を検出した。

遺物包含層はGL-1.1m前後の明灰色粘土で、第1次調査では古墳時代水田遺構のベースになっており、やはり須恵器、土師器片が出土している。

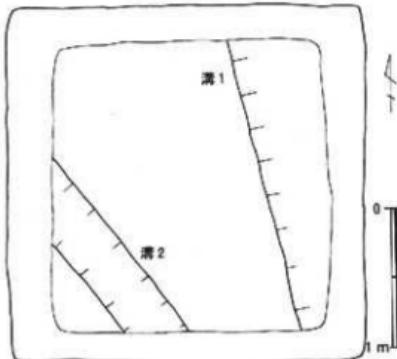
そして、この包含層の下部GL-1.3m前後で土坑状遺構が検出できた。遺構がみられた断面は東西方向の壁面である。遺構は黒灰色粘土層と褐灰色シルト層をベースとしており、埋土は暗灰色砂混粘土で炭、木片を含んでいる。幅約2.5m、深さ約0.6m。埋土中より須恵器蓋杯、壺、土師器鉢等が出土している。埋土中の遺物から6世紀中葉を下らない時期が考えられる。

7. 出土遺物

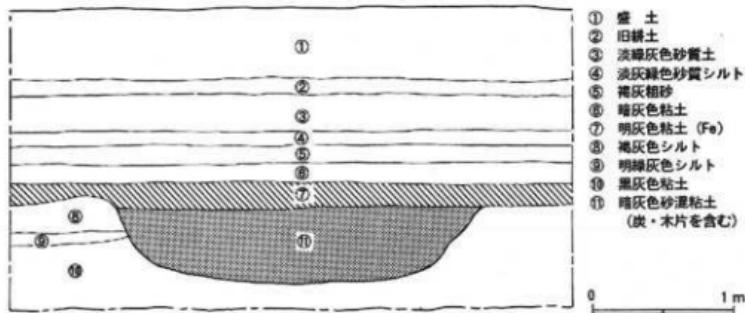
(1~7)は土坑状遺構出土遺物である。このうち(8)のみが土師質で他は須恵器である。(1)の杯蓋は口径15.4cm、器高4.4cm。天井部は偏平化しており、稜線は鈍くほとんど外方に突出しない。口縁端部内面に1条に沈線を巡らす。(2)は口径12.4cm、器高4.6cm。稜は上下をユビナデしつまみ出している。口縁端部は内傾する。(3)は口径14.8cm、器高



第3図 基本層序模式図 (1/40)



第4図 溝1、2平面図 (1/40)



第5図 北側断面略測図 (1/40)

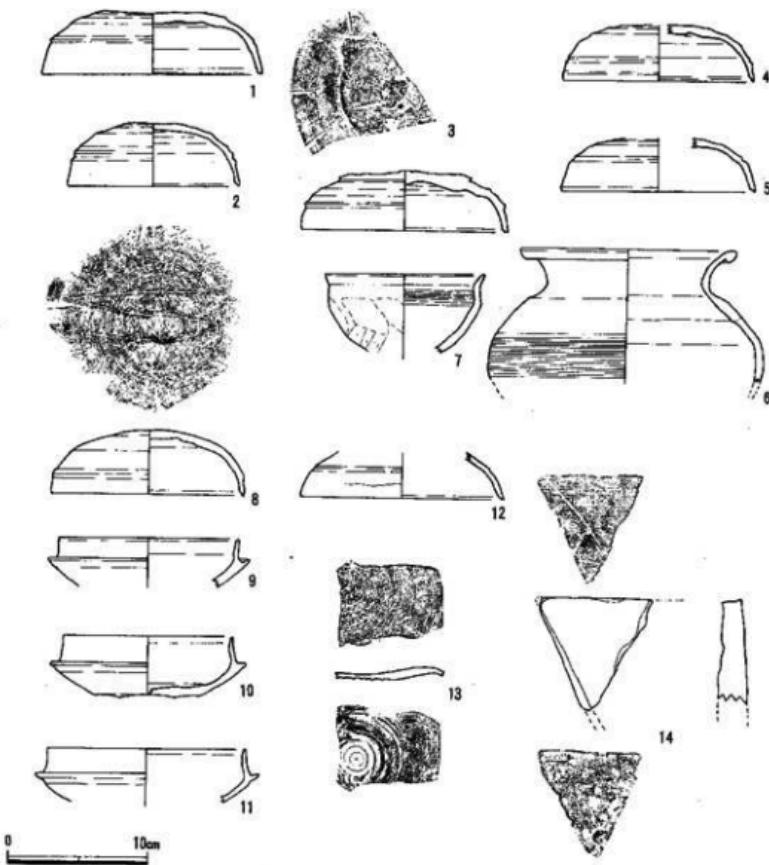
4.3cm稜線は純く、口縁端部は内傾する明瞭な段を有する。天井上部1/2は成形が行われておらず、一段高くなつており薙痕、押圧痕がみられる。(4)は口径14cm、器高4.1cm。稜線は突出せず、下方に沈線を巡らす。口縁端部は内傾する明瞭な段を有する。(5)は口径14.2cm。口縁端部は内傾する面をもつ。(6)は壺で口径15.4cm。口縁は外湾して外上方にのび、端部は肥厚して内湾する端面をもつ。体部外面にはカキ目調整を施す。(7)は土師質の鉢で、口径11.8cm。外面底部はイタナデを施し、上部はナデを行う。内面はハケメ調整がみられる。

これらの土坑状遺構出土遺物、特に須恵器はMT15～TK10型式の範囲に収まり、6世紀中葉に比定される。

(8)は明灰色粘土出土遺物の杯蓋で口径14cm、器高4.6cm。天井部はや丸く、稜線は丸くほとんど突出していない。天井部から体部にかけてZ字状のヘラ記号が施されている。TK10～43型式。

(9～14)は暗灰色粘質土～暗灰色シルト混粘質土出土遺物である。(13)は内面に同心円文スタンプを有する杯蓋である。外面にヘラケズリ調整を行い、内面に同心円文スタンプの押圧痕跡が中心部付近にみられる。これは江浦洋氏によって分類されたA類に相当し、A類はヘラケズリの際の当具の痕跡の可能性が高いとされている。但し、当該資料は薄く（最も薄い部分で2mm）しかも偏平であり、本来杯蓋としての形を成していたか、あるいは使用される状態であったかどうかは疑問である。

(14)は盾型埴輪あるいは蓋形埴輪の一部と思われる。外面にヨコハケを施し、内面にナデを用いており、指頭痕がみられる。



第6図 出土遺物実測図 (1/4)

土坑状造構出土(1~7)、明灰色粘土(Fe)(8)、暗灰色粘質土~暗灰色シルト混粘質土(9~14)

8. まとめ

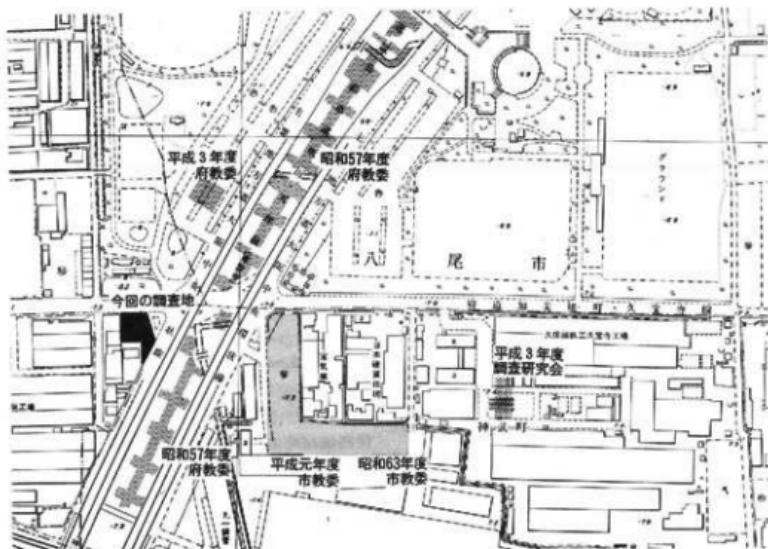
本調査では6世紀から7世紀にかけての遺構、遺物を検出したが、第2次調査で見つかった土坑状造構はその性格が明らかではない。また、形象埴輪片が出土したことから周辺に古墳の存在の考えられる。しかし今回の調査は十分ではなく、以上の問題を提議するに留めたい。(瀧)

9. 参考文献

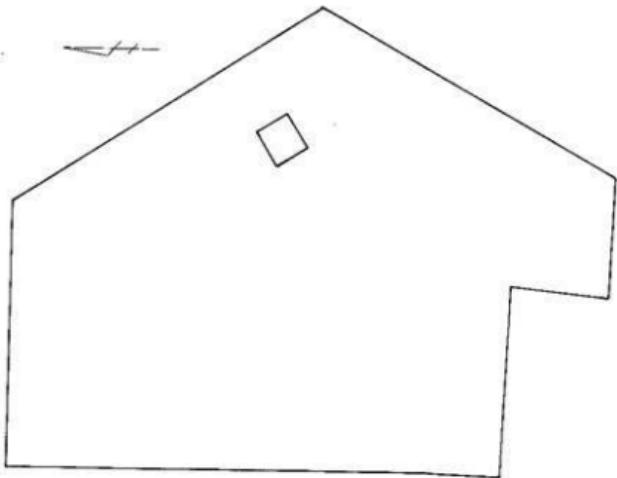
江浦洋「古墳時代窯跡出土須恵器の技法的特徴」『日置荘遺跡(その3)』(姫大阪文化財センター1988)

2. 久宝寺遺跡（91-479）の調査

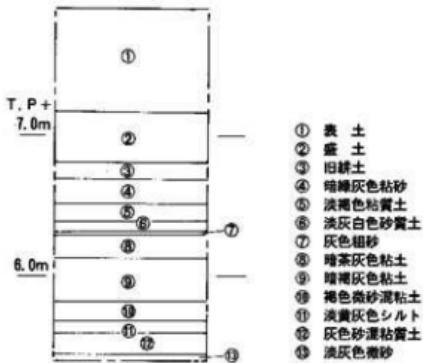
1. 調査地 神武町190-1
2. 調査期間 平成4年2月17日
3. 調査契機 店舗付き共同住宅建築工事
4. 調査方法 3m×2.5mの調査区を設定し、地表下2.6mまで重機と人力を併用して掘削、調査を行った。
5. 基本層序 遺物包含層は地表下1.6mの暗茶灰色粘質土（層厚18cm）以下、暗褐色粘土（層厚30cm）、褐色微砂混粘土（層厚14cm）で古墳時代前期（布留式古相）の遺物が出土している。地表下約2.2m以下では粘性シルト～微砂相が堆積しており、遺構・遺物ともにみられなかった。
6. 遺構・遺物 暗褐色粘土層上面（TP+5.6）と褐色微砂混粘土層上面（TP+5.3）でピットを各1基検出した。いずれも布留式期に相当する。上層面では炭化物がみられ、ピットは最大幅0.56m、深さ0.3mを測る。遺物はいずれも小片であったが、コンテナ1/3箱出土している。



第7図 調査地周辺図 (1/5000)



第8図 調査区設定図 (1/400)



第9図 基本層序模式図 (1/40)

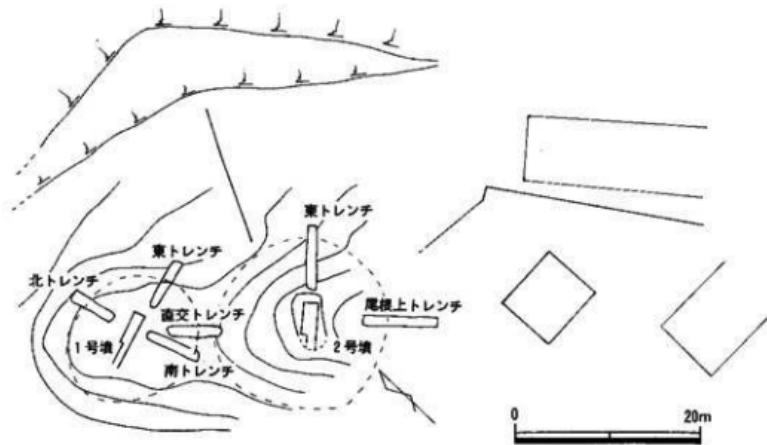
7. 備考 大阪文化財センターによって行われた本調査地の東に接する近畿自動車道建設に伴う調査でも同時期の遺構が確認されており、今回の調査は西への広がりが確認できたものである。 (潜)

3. 高安古墳群－妙見寺境内1・2号墳(91-562)の調査

1. 調査地 黒谷5丁目98番地
2. 調査期間 平成4年3月26日～5月16日
3. 調査経過 宗教法人 河内妙見寺より境内の西側を整備したいという申請を受けたため、事前に現地踏査を行ったところ、北西方向にのびる尾根状地形に3ヶ所の古墳状の高まりを確認することができた。このうち尾根先端側の2ヶ所は石室の一部が露出しており、今回の調査ではとりあえず下から妙見寺境内1・2号墳と命名した。(以下1号墳・2号墳と省略する)これらは1990年に高安城を探る会によって確認された黒谷4号墳、同5号墳にそれぞれ対応する。調査は3月26日～31日まで2基の古墳を中心として地形測量を行ない、この後4月1日～5月16日まで2基の古墳の状況と古墳状隆起の実態を確認する目的で、遺構確認の発掘調査を行った。



第10図 調査地周辺図 (1/5000)



第11図 調査区設定図 (1/700)

4. 調査概要

八尾市の東部山麓一帯に分布する高安古墳群は、服部川付近でもっとも密集する。この地域は古くから高安千塚と呼ばれてきた地域である。妙見寺境内1・2号墳はこの服部川地域とは南西方向に300m程離れた字黒谷に位置する。地形的には高安山から西に流れる荒川を挟んで北西方向に尾根がのびているが、この内左岸側の尾根筋には、少なくとも7基の古墳が確認されており、尾根を単位とする小支群を想定できるような分布状況である。妙見寺境内1・2号墳はこのグループの北西端に位置する。

(1) 地形測量

妙見寺境内1・2号墳は標高105m～110m付近に立地する。古墳の立地する尾根筋の西側は標高105m以下は崖状地形となっているが、東側は標高100m付近まで緩やかな傾斜地をなしたのち、急激に谷へ落ちる。また、2号墳の北東側は、近年の人工的な盛土により、全体北側に地形が張りだすというような、改変を受けている。また1・2号墳の墳頂部はテラス状に削平を受けており、1号墳の北西側には石垣がつくられている。戦時に畠地として利用されていたということも、伝聞しており、石室の上半分の破壊もその際に行われたものかもしれない。また1号墳と2号墳の間の北東側の鞍部分の裾付近にも石垣があり、また2号墳の北東側の緩斜面にも等高線と直交する方向に石垣が作られている。現在も一部植樹が行われており、1号墳の北東部の墳裾を中心に削平がなされたようである。

さて、地形測量図から得られる墳丘築造、規模、プラン等に関する所見は、発掘調査結果と併せて後述したい。

(2) 発掘調査

〔トレンチの設定方法〕

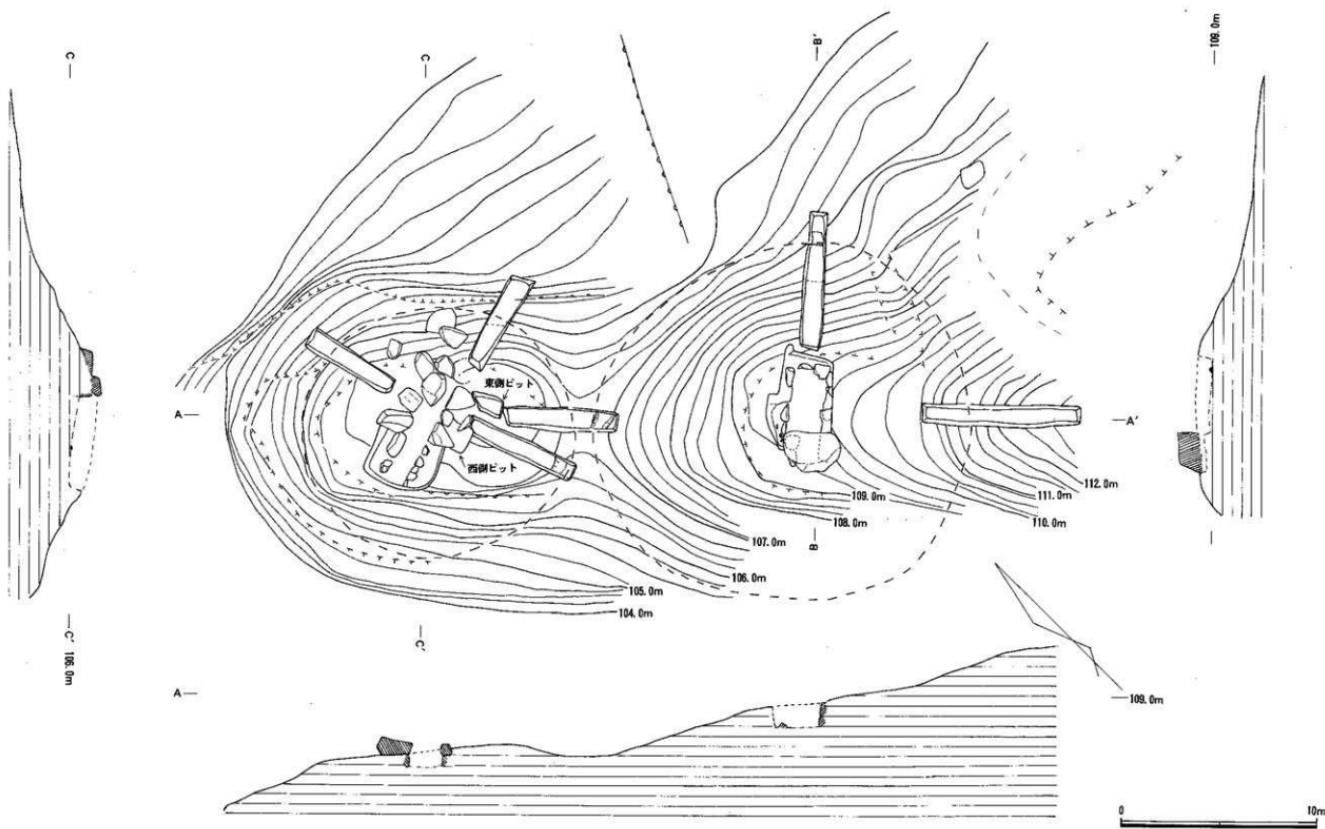
石室と墳丘の遺存状況及びその最小限のデータを得るために、トレンチを設定した。1号墳は石室部分及び石室主軸に直交する二方向（それぞれ北トレンチ、南トレンチ）と石室主軸の奥壁方向の延長上のトレンチ（東トレンチ）を設定した。2号墳も、石室部分と石室の主軸の奥壁方向の延長上にトレンチ（東トレンチ）を設定した。また、1号墳と2号墳の境界を確認するために、1・2号墳間の鞍部から1号墳にかけて、トレンチ（直交トレンチ）を設定した。この他、2号墳の北東側の古墳状隆起の実態を明らかにするためにトレンチ（尾根上トレンチ）を設定した。なお、石室のトレンチの掘削は、調査の目的上、石室プランがある程度わかる範囲での表土と石室内流入土の掘削に留めた。

〔1号墳の調査〕

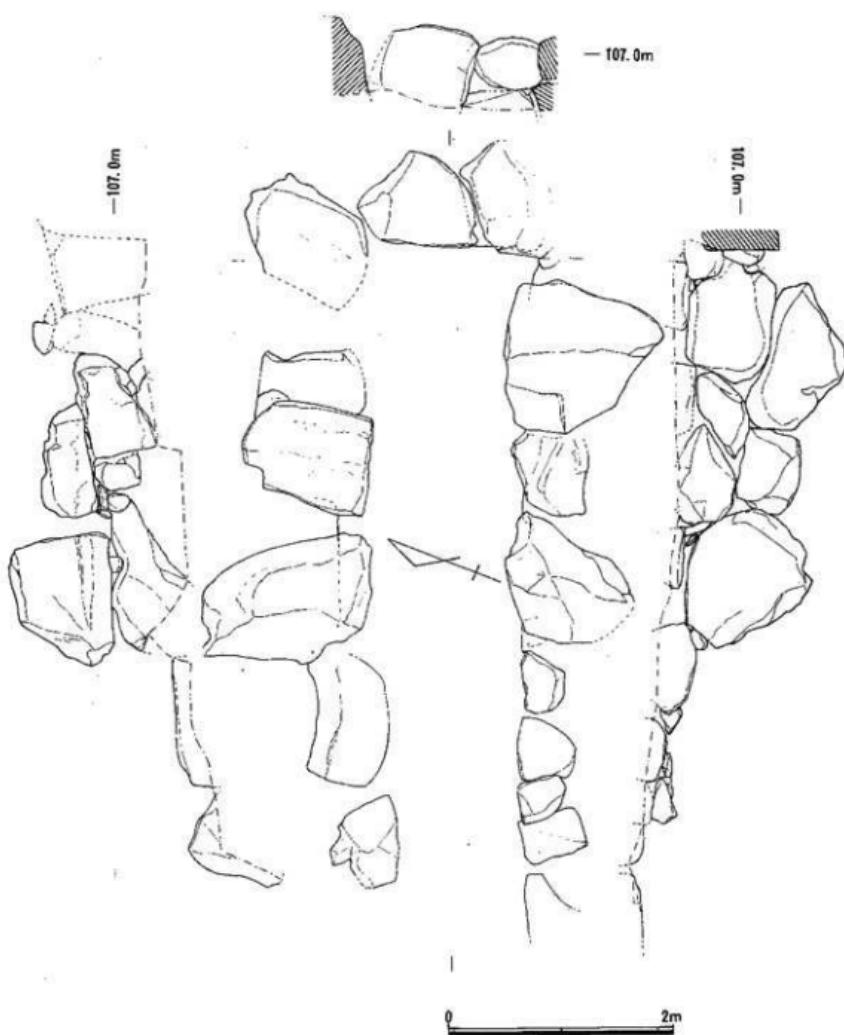
① 石室トレンチ

掘削前の石室の現況は玄室の上から2段目付近の側壁がみえている状況であった。また奥壁付近の天井石が石室内に落ち込んでいた。そこで羨道想定部分にトレンチを設定し、掘削を行ったところ、羨道部を2.8m分検出した。これより先の部分は現況の石垣による攪乱により、判然としなかった。この結果、この石室は奥壁からみて右側に袖をもつ右片袖式の石室であることがわかった。更に、石室の規模は検出部分で長さ6.1m、このうち玄室の長さは3.8mを測る。奥壁の幅は1.5m、羨門部の幅は1.24m測る。また、玄室部分は最大幅は1.6m、羨道部の最大幅は1.26m、玄室側壁の検出部分での最大遺存高は1.58mを測る。

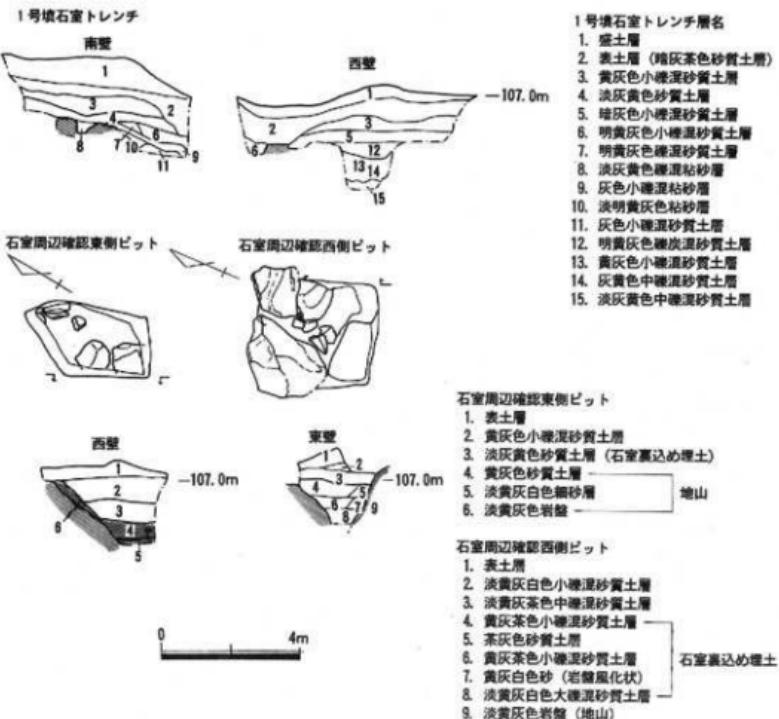
石室の流入土の状況は、羨道の検出部の先端部に設けた土層確認ピットの状況から標高105.7m付近に灰黄色中礫混砂質土層の堆積することを確認した。これは石室破壊前の流入土である可能性をもち、ここから須恵器の壺片が出土した。（第16図、2）この上に石室破壊後の流入土が堆積する。羨道先端へいくに従い、石室の破壊が著しくなるため、流入土の厚さは南端では0.6mに及ぶ。石室トレンチ南壁では、羨道側壁の石が抜き取られた後、東上方から流入土の堆積している状況がみられた。さて、石室の床面が標高105.7m付近にあったと考えると、玄室高は2.2m以上であったことになる。側壁の石組の状況は、検出部分が少ないと判然としないが、玄室と羨道の境界の玄室側の石は、意識して特に大きなものを使用しているようである。



第12図 妙見寺境内 1、2号墳 墓丘測量図 (S=1/200)



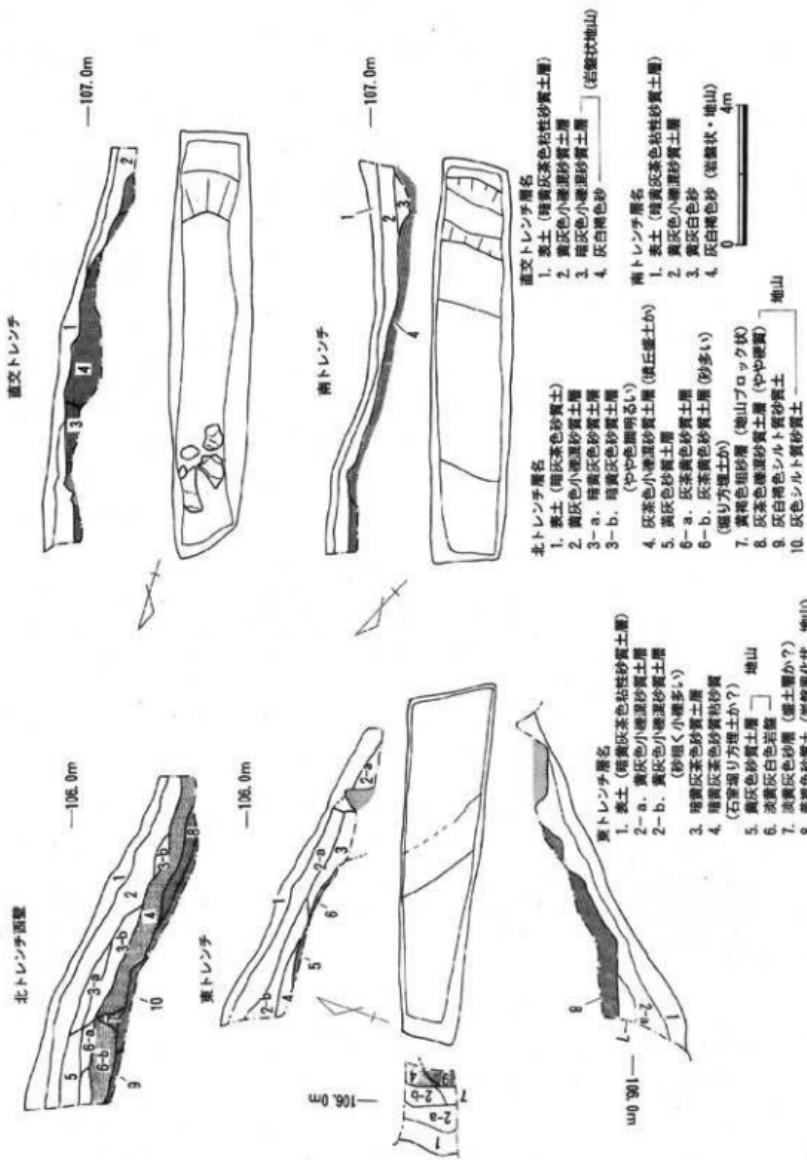
第13図 1号墳石室 平・立面図 (1/50)



第14図 石室トレンチ断面図及び石室周辺確認ピット 平・断面図(1/80)

② 石室周辺確認ピット

石室の裏込めの状況を確認するために、左側壁の南側に2カ所のピットを設定した。東側のピットでは側壁の石に接して $0.5 \times 1.6\text{m}$ の範囲を掘削したところ、側壁から 2.7m 離れた位置で掘り方の上端になると思われる淡黄灰色の岩盤のたち上がりを確認した。掘り方の埋土すなわち裏込めの土は淡黄灰色砂質土層及び黄灰色小礫混砂質土層である。西側ピットでは側壁の石に接して、 $1.5\text{m} \times 1.2\text{m}$ の範囲を掘削したところ、側壁から 1.8m 離れた位置で掘り方の上端になると思われる岩盤のたち上がりを確認した。裏込めの土は黄灰色～黄灰茶色系の砂質土層であり、 0.3m までの石を含む。以上から当墳では地山である岩盤がある程度掘り窪めて、石材を設定し自然石と土で裏込めを行っていることがわかる。



第15図 1号墳 墳丘トレンチ 平・断面図(1/80)

③ 北トレント

土層観察結果から次のことが考えられる。地山である黄灰色系の岩盤の上に約 0.2m の灰茶色小礫混砂質土層を盛土としておいている。側壁から北へ 2.8m付近で灰茶黄色砂質土層のきりこみがみられるが、これが石室掘り方の下端付近にあたる可能性がある。しかし尾根の低い側である右側壁側では地山が下がっているため、地山を浅く掘り窪めたのみで基底石を設定し、直接裏込めの土を補強しているかもしれない。いずれにしてもこの裏込めの土層のほとんどは削平されており、この上に暗黄灰色系の流入土が堆積する。また、地山の上に堆積する盛土推定層である灰茶黄色砂質土層は標高 104.6m付近で平坦になっており、墳丘裾がこの付近に位置する可能性がある。

④ 東トレント

標高 105.8m前後、奥壁から 2.9mあたりから、地山である黄褐色砂質土層を人為的にテラス状に削りだしてあるようである。奥壁から1.64m東側で石室の掘り方になると思われる地山の掘り込みがみられる。テラスの上の淡黄灰色砂層は盛土層の名残りであるかもしれない。この上にはさらに石室の裏込めを兼ねた盛土層が存在していたものと思われる。地山は標高105.06m付近で一旦平坦になっており、この付近の墳丘の裾があつた可能性がある。

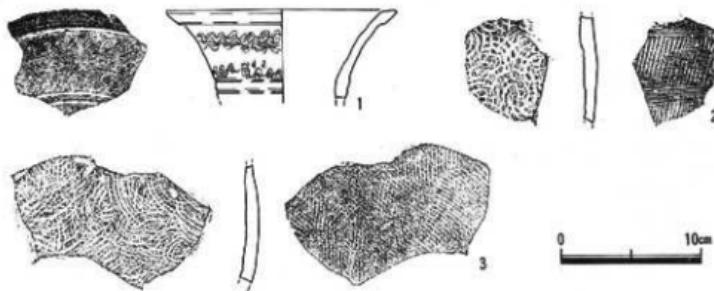
⑤ 南トレント

表土直下もしくは黄灰色小礫混砂層をはさんで下に地山が存在する。左側壁から 6.6 m付近で地山の落ちこみがみられ、2号墳との境界となる溝状施設の肩かと思われる。

⑥ 直交トレント

ここでも地山は非常に浅いところで検出できる。側壁から7.4~8.3mの地点で境界となる溝状の地山の落ちを検出した。この溝は上端の幅0.96m、深さ0.18mを測る。

この溝状構造はその位置や平面プランから2号墳に伴うものである可能性が高い。



第16図 出土遺物実測図 (1/4)

⑦ 出土遺物

須恵器が3点出土した。いずれも後世の流入土に伴うものである。出土遺物の概要は次の表のとおりである。

器種	出土場所	法量	形態の特徴	調整の特徴	色調	焼成	胎土
長頸壺	石室右袖部、 黄灰色小縫混 砂質土層	口径 16.3m 現在高6.45m	口縁部はゆるやかに 外上方にたちあがり 口端部に幅 1.5cmの 薄い粘土帯を貼りつ ける。	二带一組の波状文を施 したのち頸部下方に二 条の沈線をいれる。	灰色	硬質	99組
壺	羨道部先端土 層確認ピット 黄灰色小縫混 砂質土層			外面はタタキのちにカ キメ、内面に青海波文 残る。	淡暗 灰色	硬質	粗
壺	東トレンチ、 西端黄灰色小 縫混砂質土層			外面は格子状のタタキ のちに磨り消しを行 なう。内面は青海波文 を一部ナデ消す。			

⑧ まとめ

当墳は石室の上半分、特に羨道部分は著しく破壊されている。石室は、右片袖で開口方向はW-20°-Sにとる。また、墳丘は北、東、南のそれぞれのトレンチで検出した地山及び盛土推定層の落ちを墳裾であるとすると、径12.5mの円墳になる。また墳丘の最大遺存高は約2.7mである。墳裾部の削りだし以外には外表施設は確認できなかった。発掘調査で得られた知見をもとに、墳丘の築造法を推察すると、まず、尾根に上端をテラス状にカットしたのち、地山である岩盤を掘り産めて石室の掘り方を設定する。この際、尾根の低い側は更に若干の盛土を行ったのちに掘り方が掘削されたか、低い側にあわせて左側を深く掘る形で掘り方が設定されたかは判断できない。掘り方内に側壁となる石材が積まれ、南西の左側壁側では掘り方内に裏込めの砂質土層や疊がいれられる。右側壁側は砂質土層、粗砂層が使用された。この後、天井石の設定が行われ、さらに盛土が行なわれたものと思われる。

(2号墳の調査)

① 石室のトレンチ

掘削前の石室の現況は1号墳と同様、墳丘の上端が削平され、見上石一石のみが見えている状況であった。そこで、見上石の東側の石室想定位置にトレンチを設定、掘削を行ったところ、玄室部分を検出した。奥壁の石材が下へずれ落ちた状態であるため、正確な数値はわからないが、長さ 3.4m以上、最大幅 1.7mの右片袖式の石室となる。石室の開口方向はW-38°-Sである。羨道部は西側がすぐ崖となっているため、掘削を行なえなかったが、長さ 1.4m分を確認しており、羨門部の幅は約1.05mをはかる。側壁は左側壁の一部が見上石の下端のレベル位まで遺存しているが、右側壁の抜き取りは著しい。石室内の流入土は黄灰色系の砂質土層であり、厚いところで 0.9mに及んでいる。石室の北西の壁面、すなわち奥壁から 0.6m離れた位置で地山である黄灰白系の粘土層を確認した。これは石室の掘り方のベースとなった地山の一部を検出したものと思われる。

② 東トレンチ

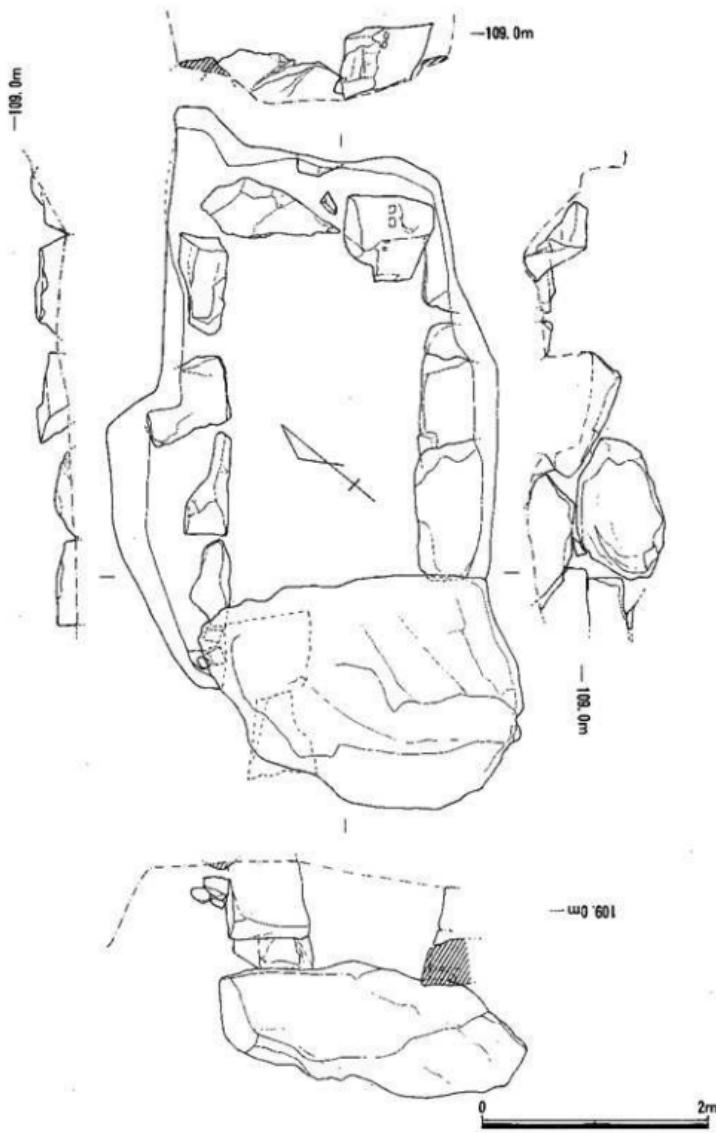
地山である褐黄灰色粘砂土層はやや起伏をなして傾斜しているが、標高 106.4m付近、奥壁から 4.4m付近で一旦平坦になり、更に標高 106.6m付近、奥壁から約 6.1m付近で急激に落ち込む。この平坦面は幅 1.7mを測る。おそらく1号墳と同様に人為的な削りだしによって墳裾がつくりだされたものと思われる。

③ まとめ

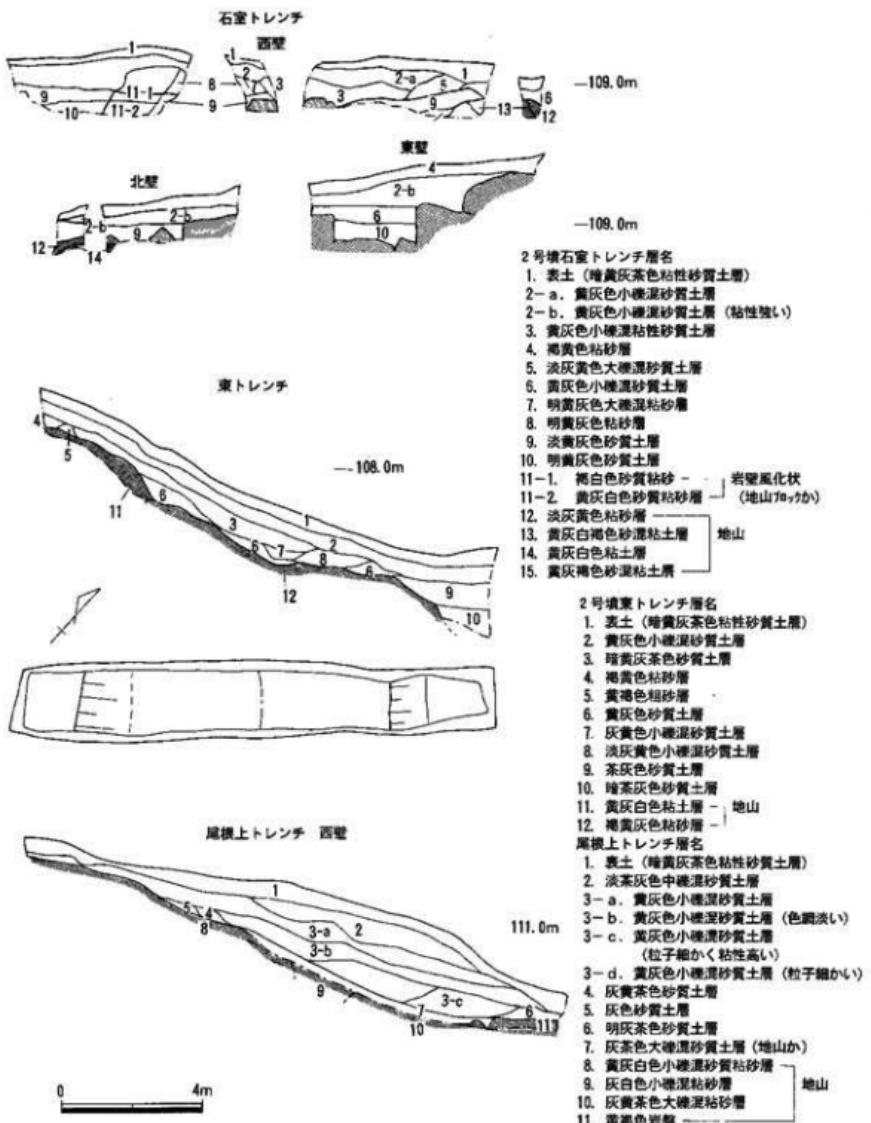
当墳は石室の上半部特に石側壁上半部分は著しく破壊されている。また、墳丘は東トレンチで検出した墳裾のテラス部分及び直交トレンチで検出した溝状造構のありかたから径15m前後の円墳になる。また墳丘の最大遺存高は約 2.3mである。外表施設は墳裾部の削りだし、及び墳丘北西側で検出した溝状造構のみである。墳丘の築造方法は、今回の調査からは言及できないが、1号墳と同様に地山をカットしたのち、掘り方を設定された可能性が高い。

[尾根状トレンチ]

2号墳の南東側の尾根上に幅 1m、長さ 7.5mのトレンチを設定した。この結果、比高差 2.4mで傾斜する黄灰白色小礫混砂質粘砂層の地山を検出したに留まった。地形測量から古墳状隆起と捉えていたものは、流入土の堆積であることがわかった。



第17図 2号墳石室 平・立面図 (1/50)



第18図 2号壙 石室トレンチ、東トレンチ、尾根上トレンチ 平・断面図(1/80)

(小 結)

妙見寺境内1・2号墳は墳丘及び石室の上半が破壊されていはいるが、石室内の下半部は流入土の状況から比較的良好に残っている可能性がある。

また、両墳の築造順序については、判断材料に欠けるが、玄室プランが方形に近いものが古いという型式学的な知見を単純に流用すると、1号墳の玄室幅の玄室長に対する割合は40%であり、2号墳は45%であることから、2号墳が若干先行して作られている可能性がある。しかし、この数値は検出部分でのそれであり、また、個体差の範囲にとどまるものであるので、不確定要素が高い。

妙見寺境内1・2号墳は6世紀後半頃に尾根状の地形を利用して相次いで造られた、片袖式の横穴式石室を主体部とする古墳である。両墳は他の尾根上の古墳とともに、小支群とも呼び得るグループを形成するものであったと思われる。今後、高安古墳群の造墓主体の実態を明らかにしていくにあたっては、個々の古墳の調査の積み重ねをもとに、その群構成の分析を行う必要があろう。しかしながら、高安古墳群の現状は分布調査においても、歴然と示されているように、近年急速に破壊が進行している。群集墳においては、これを構成するひとつひとつが高い歴史的価値を有するものであることはいうまでもない。可能な限りの保存が望まれる。

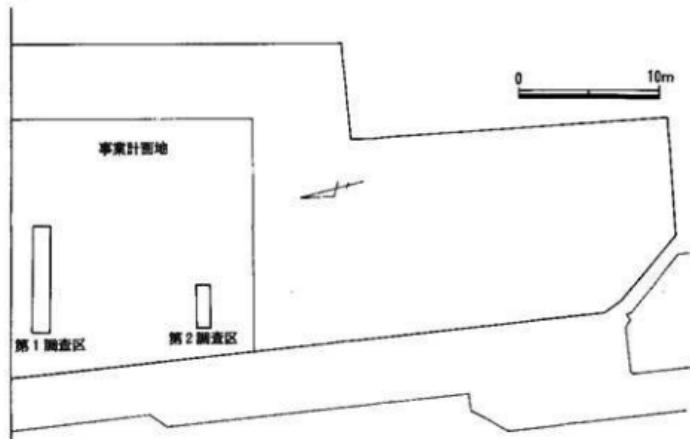
(吉田)

4. 萱振遺跡（92-006）の調査

1. 調査地 萩振町7丁目83-1、74-1
2. 調査期間 平成4年度4月6~9日
3. 調査契機 専用住宅建設に伴う地盤改良工事
4. 調査方法 住宅建設の北側に1m×7.5mの東西方向のトレンチ（第1調査区）と中央部分に1m×3mのやはり東西方向のトレンチ（第2調査区）の2カ所設定し、人力のみで地表下1mまでの掘削を行った。
5. 基本層序 第1層 表土層で近年の地上げに伴う盛土を行い、最近まで畑作用地として利用されていた。
第2層（暗オリーブ灰色粘砂）近世～現代の耕作土と考えられ、瓦器碗、須恵器、土師器の磨耗した小破片を含む。
第3層（暗茶灰色粘質土）この層の上面より掘り込まれた遺構がみつかっており、この面が近世の遺構面となり、また層中より土師器、須恵器、瓦の破片とともに瓦器碗の破片が多くみられることから中世の包



第19図 調査地周辺図 (1/5000)



第20図 調査区設定図 (1/400)

含層でもある。

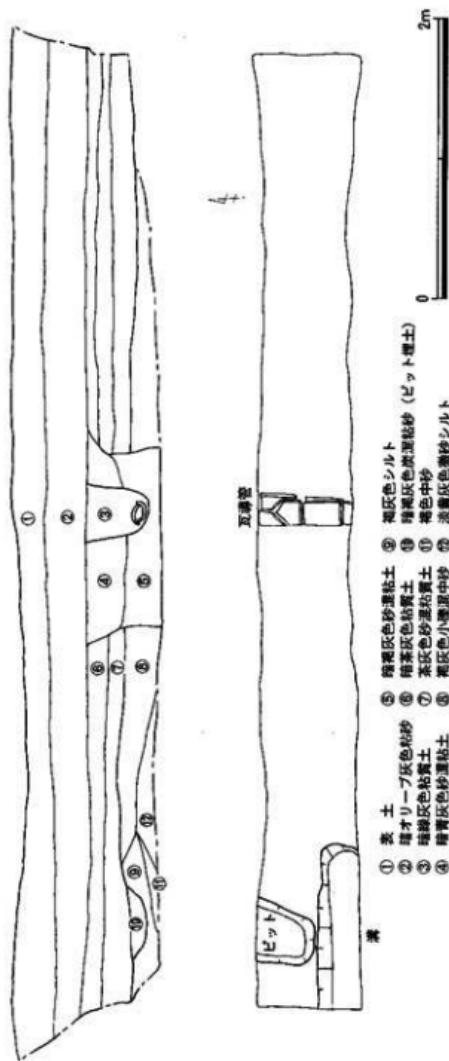
第4層 (茶灰色砂混粘質土) 瓦器碗、土師器、羽釜、須恵器、瓦等の破片を含む第2の中世包含層になる。しかし、この層はトレンチ西南部分では見られなくなり、灰茶色粘砂が変わって堆積している。この灰茶色粘砂上面では東西方向の溝状の遺構が検出され、その出土遺物から、僅かに残る古墳時代中後期の遺構面とみられる。

第5層 (褐灰色小礫混中砂) 溝水層であるが、この層中には須恵器、土師器を含む層である。この層はトレンチ西端ではみることができなくなり、変わって褐灰色シルト層が堆積する。第5層を形成する褐灰色小礫混中砂は褐灰色シルトを覆うように堆積しており、また第4層で確認出来た灰茶色粘砂の下部に位置する。この褐灰色シルト層の上面からピットが切り込まれており、出土遺物より古墳時代の遺構面となると考えられる。

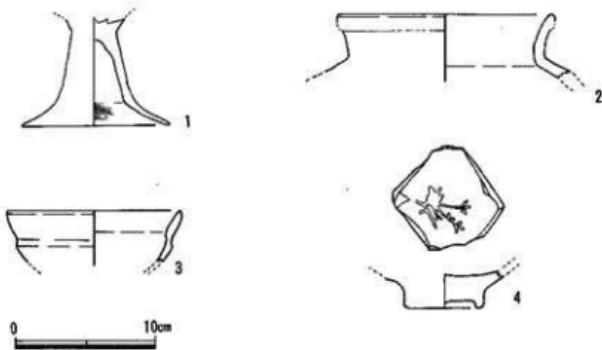
6. 遺構・遺物

〔瓦導管〕 トレンチほぼ中央部、第3層上面より構築されていた。幅0.43m、深さ0.45mの南北に伸びる溝状に掘られており、丸瓦を互い違いに組み合わせて筒状にして並べてあった。近世に樋として用いられたものであろう。

〔溝〕 第4層とはほぼ同じレベルでトレンチ西南部に堆積している灰茶色粘砂上面から掘り込まれている。検出長1.2m、幅0.3mだが、も



第21図 第1調査区平面及び断面図 (1/40)



第22図 出土遺物実測図 (1/4)

一方の肩は調査区外に伸びるため不明。遺物は僅かであったが、ここでは1・2を挙げておく。1は土師器の高杯の脚柱部である。鉄分の付着が激しく調整は不明であるが、脚部内面に僅かにハケメがみられる。2は須恵器の甕の口頸部である。

〔ピット〕 第5層と同じレベルでトレンチ西端でみられた褐灰色シルト上面から掘り込まれている。検出長径0.46m、短径0.33m、深さ0.15mを測る。埋土には炭化物が混じっていた。やはり遺物は少ないが3の土師器の鉢が出土している。古墳時代前期に比定できる。

4は褐灰色小礫混中砂層で出土した青磁碗の高台部である。印花文は不鮮明で明確にはわからない。同じ層中より土師質及び瓦質の羽釜、須恵器の甕、繩目叩きの瓦等が出土しているが、特に羽釜から12~13世紀に比定できよう。

7. 備考 調査地近辺の調査では、北側で大阪府教育委員会による高校建設に伴う調査が行われ、縄文時代晚期から中世に至る遺構・遺物が出土している。今回はそれから道路一つ隔てた場所で行ったもので、上記の調査で、特に顕著に遺構が検出された弥生時代末期から古墳時代前期にかけての遺構面がみられることが期待された。しかし、若干の古墳時代の遺構は確認できたものの大半は12~14世紀に改変されていた。だが周辺にそれらの遺構があったことを示す多くの土師器、須恵器が出土している。なお本調査地付近は「宮の下」、高校付近は「堂の北」とよばれていた。

(道)

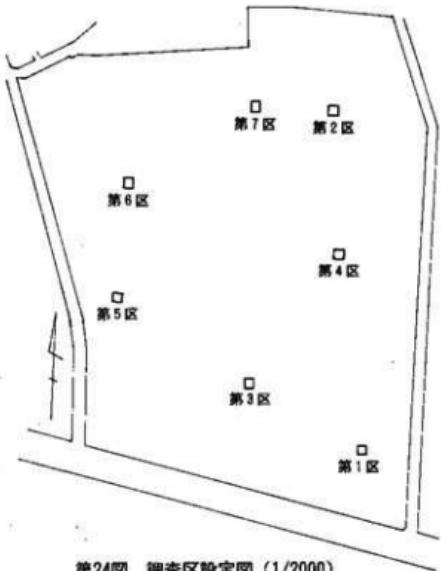
8. 参考文献 広瀬雅信「萱振遺跡調査速報」『八尾市文化財紀要Ⅰ』1985.3

5. 植松遺跡（91-626、627）の調査

1. 調査地 永畠町3丁目1-1他、永畠町3丁目15-1他
2. 調査期間 平成4年度4月13、14日
3. 調査契機 共同住宅、駐車場付店舗建設
4. 調査方法 91-626と627は申請者は異なるが、一連の開発事業であり同時に遺構確認調査を実施した。調査は3m×3mの調査区を7カ所設定し、地表下2m前後まで人力と重機を併用した。また下層確認のために、2.5mまでを重機で掘削した。
5. 基本層序 第1区-地表下2.7mまで掘削した。旧耕作土は地表下0.6m前後にあり、以下約0.5mの厚さで粘砂-砂質シルトが堆積しているが、地表下1.1mの⑤淡褐色粘砂上面では時期は不明であるか流路が確認できた。地表下1.25m以下は粘質土-粘土の堆積である。
第2区-地表下1.4mの①淡緑灰色粘土を切り込む自然河川が調査区の大半を占めていた。河川の床面である淡緑灰色粘土より土師器片が出



第23図 調査地周辺図 (1/5000)



第24図 調査区設定図 (1/2000)

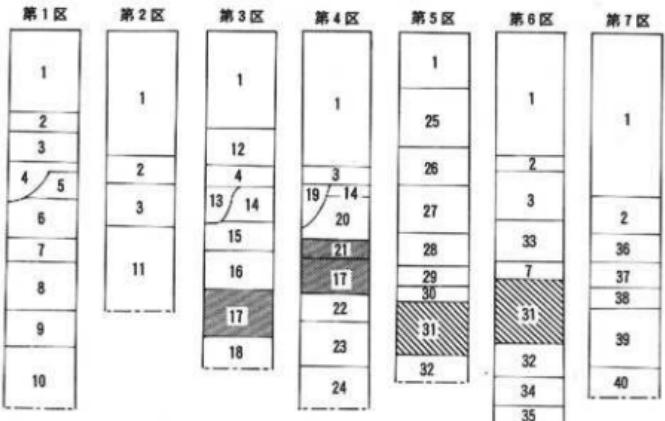
上している。河川の埋土である砂層からの湧水のため地表下2mまで調査を中止した。

第3区－古墳時代の包含層が地表下1.85mで確認できた。包含層は①暗茶褐色粘土で、およそ0.3mの厚さで堆積している。遺物は土師器と若干の須恵器片が出土している。

第4区－調査区の北東部分は擾乱されていたが、西南部分で遺物包含層が確認できた。包含層は地表下1.6m前後の②暗茶褐色粘沙～③暗茶褐色粘土で、約0.4mの厚さで堆積している。遺物は土師器破片や須恵器の壺片等が出土している。

第5区－地表下1.95m前後の④暗緑灰色粘土～シルト混粘土が7世紀代の遺物包含層になる。包含層は約0.4mの厚さで堆積している。また土層中には炭化物が多量に含まれており、調査区周辺に居住域が存在する可能性も考えられる。

第6区－第5区の北、およそ40m付近に設定した。遺物は地表下1.8m前後の⑤暗緑灰色粘土～シルト混粘土で出土した。第5区でみられた遺物包含層の北への拡がりと、南から北への若干の傾斜を併せて確認することができた。



- | | | | | |
|------------|--------------|-------------|-----------------|--------------|
| 1. 盛土 | 9. 淡淡灰色粘砂 | 17. 暗茶灰色粘土 | 25. 淡黄色沙質シルト | 33. 灰色小粒混細砂 |
| 2. 旧耕作土 | 10. 灰黑色粘質シルト | 18. 明灰色沙質土 | 26. 淡黄色沙質土 | 34. 綠灰色粘土 |
| 3. 淡綠灰色粘砂 | 11. 淡綠灰色粘土 | 19. 疣綠灰色粘砂 | 27. 明褐色沙質シルト | 35. 灰黑色微砂 |
| 4. 紫色混粗砂 | 12. 紫色シルト | 20. 淡褐色沙質土 | 28. 灰白色沙質土 | 36. 灰色粘砂 |
| 5. 淡褐色粘砂 | 13. 淡青灰色粘砂 | 21. 瑞茶灰色粘砂 | 29. 紫綠色シルト | 37. 明褐色沙質土 |
| 6. 暗灰色粘質土 | 14. 淡黃褐色粘砂 | 22. 灰白色中砂 | 30. 暗茶褐色シルト | 38. 灰色粗砂 |
| 7. 暗灰色粘土 | 15. 淡灰褐色沙質粘土 | 23. 淡黃褐色シルト | 31. 瑞綠灰色粘土-シルト混 | 39. 淡灰褐色沙質混砂 |
| 8. 暗淡綠灰色粘土 | 16. 淡灰色粘砂 | 24. 淡青灰色粘土 | 32. 瑞綠灰色粘砂シルト | 40. 灰色雜砂 |

第25図 基本層序模式図 (1/40)

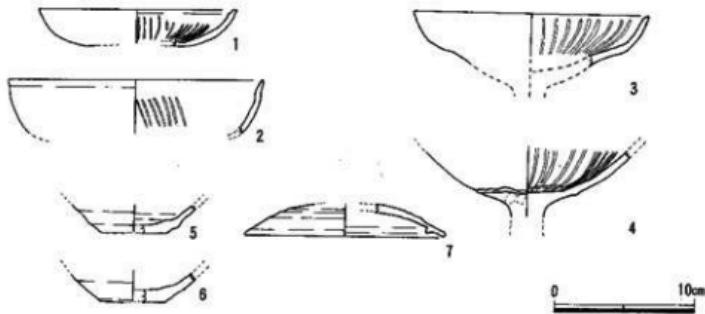
第7区 - 調査地の北端中央に設定した。約 1.2m の盛土を除去する。旧作土が現れる。以下 2.6m まで掘削したが、粘砂層及び砂層が堆積する。遺構・遺物等はみられなかった。

6. 遺構・遺物

第3区・第4区・第5区・第6区で良好な遺物包含層を確認することができた。第3区と第4区が、第5区と第6区が同一の包含層の拡がりと思われる。特に第5区では密に遺物が出土している。出土遺物は7世紀前半に位置づけられ、藤原宮土器編年では飛鳥I～IIIに比定できよう。1は土師器杯C IIで、口径14cm、器高2.6cm。内面に放射状暗文を施す。2は土師器杯C Iで、口径18.2cm。内面に放射状暗文を施し、外面上にはイタナデ痕が僅かに残る。3・4はいずれも土師器高杯で、内面に放射状暗文を施す。5・6は須恵器杯Gの底部である。7は須恵器杯蓋。

7. 備考

本調査地の南東側隣接地では昭和58年度に当教育委員会が調査を行い、平安時代前期の掘立柱建物、溝等の遺構を検出している。また、西南約300mの地点で昭和58年度に鶴八尾市文化財調査研究会が実施した調



第26図 出土遺物実測図 (1/4)

査では6～8世紀の遺構、遺物を多数検出しており、今回の調査で見つかった7世紀とみられる遺物包含層の形成を考える上で重要である。

(道)

8. 参考文献 八尾市教育委員会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』1983
助八尾市文化財調査研究会『昭和58年度事業報告』1984

6. 小阪合遺跡 (92-067)の調査

1. 調査地 南小阪合町1丁目6番の一部、14番
2. 調査期間 平成4年5月7、19~21日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 1次調査を5月7日に行った。これは2m×2.5mの調査区を事業計画地の南と北側に設け、各々地表下2.6mまで掘削したものであった。この時は地表下1.6mで中世の包含層はみつかっており、青磁碗、土師器布目瓦の破片が出土した。このために南側の調査区を拡張し、再度調査を実施した。調査区は約10m×10mで設定し、遺物包含層と推定された1.6mまでを機械で掘削し、以下約0.3mを人力で掘削した。
5. 基本層序 第1層の表土は最近まで耕作されていた土層で、第2層は盛土、第3・4層はそれ以前の旧耕作土層とその床土である。第5層淡灰茶色砂質土（層厚0.2m）、第6層褐色シルトは調査区の東側にだけみられる土層で、遺物はみられない。第7層暗茶褐色砂混粘土は調査区の東側では



第27図 調査地周辺図 (1/5000)



第28図 調査区設定図 (1/800)

みることができない。層厚0.12~0.18mで土師器、瓦器の破片を若干含んでいる土層である。第8層灰白色粘土で鉄分を含んでいる。層厚0.27~0.35mで中世の遺物包含層となる。第9層暗青灰色粘土は地表下1.9m (TP +7.18m) 前後にあり、その上面で今回遺構の検出を行った。暗青灰色粘土は北側では暗緑灰色粘質シルトになる。

6. 遺構・遺物

今回の調査で検出できた遺構は第5条、ピット2基で、溝はすべて東西方向に伸びている。

〔溝1〕 調査区北西端で南肩のみ検出した。検出長4m、深さ0.14m。遺物は土師器片、円筒埴輪片等が出土している。

〔溝2〕 調査区の北で検出した。1条の溝が3本に枝分かれする溝である。検出長9.5m、深さ0.2m。円筒埴輪片が出土している。

〔溝3〕 調査区の中央で検出した。検出長6.5m、深さ0.16m。遺物は出土していない。

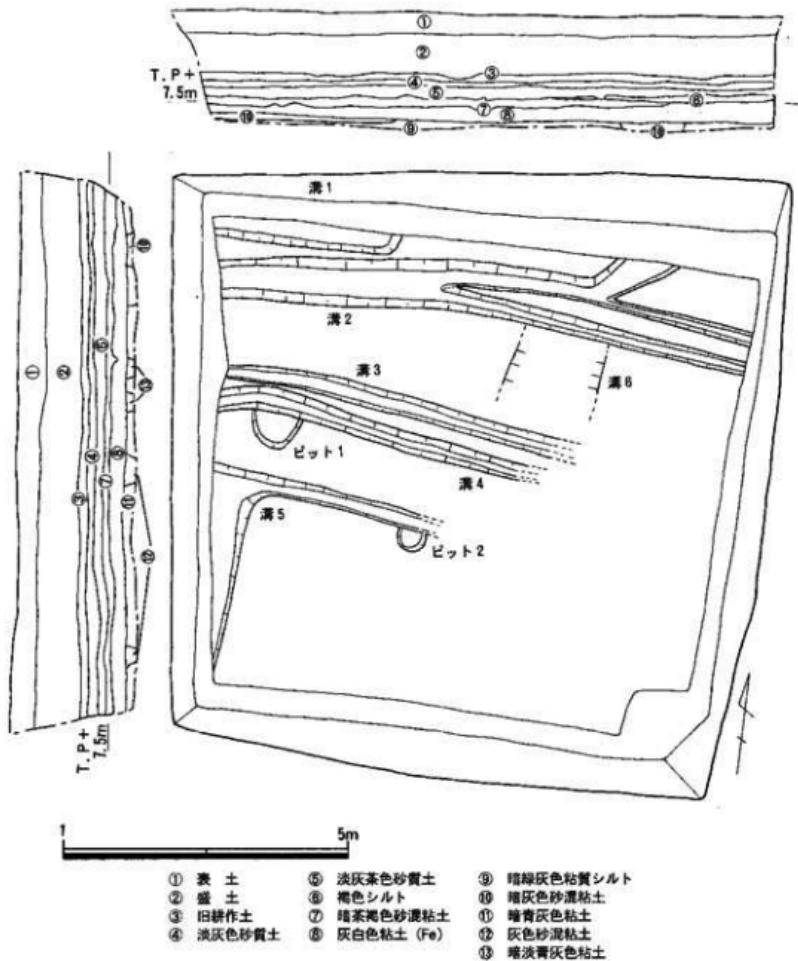
〔溝4〕 溝3の南隣で検出した。検出長5.5m、深さ0.14m。土師器、瓦器の破片が見つかっている。

〔溝5〕 調査区の南で検出した。東西方向の細い溝と南北方向の溝がL字条になっている。検出長7.0m、深さ0.15m。遺物は出土していない。

〔ピット1〕 溝4に切られているが、円形を呈すると思われるピットである。径約0.93m。遺物は出土していない。

〔ピット2〕 溝5に切られているが、やはり円形のピットである。径約0.5m。遺物は上師器、須恵器の破片がみられた。

〔河川1〕 調査区中央部分で下層確認の際にみられたもので、①層よりも0.24m下の灰色粘質シルト上面で検出した。幅1.2m、深さ0.35m。



第29図 平面及び断面図(1/100)

埋土は灰色細砂で遺物はみられない。

7. 備 考 今回の調査では中世の遺構面が検出できた。遺物は多くはみられないが円筒埴輪の破片が、数点出土している。本調査地の西側で区画整理に伴う調査では円筒埴輪棺がみつかっており、また今回も円筒埴輪、滑石小玉等が見つかっていることから周辺にかけて古墳があったことが伺える。

(清)

8. 参考文献 (助八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡(昭和59年度 第4次調査)」1988)

7. 小阪合遺跡（92-110）の調査

1. 調査地

青山町5丁目24-1の一部

2. 調査期間

平成4年6月8日

3. 調査契機

倉庫建築工事

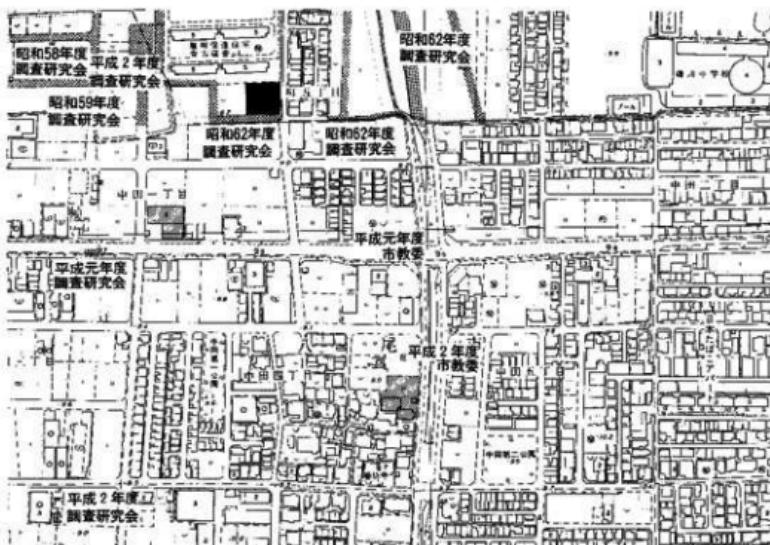
4. 調査方法

調査地の南側に1.2m×1.5mの第1調査区を、北側に2m×2mの第2調査区を設定し、地表下1.5～1.6mまでを調査対象とした。

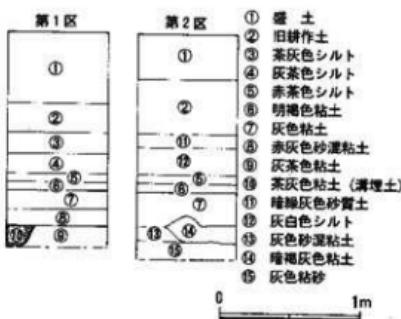
5. 基本層序

第1調査区では、約0.5mの盛土を取り除くと旧耕作土（層厚20cm）が現れる。遺物包含層は、GL-1.0mの暗赤茶色砂質シルトとその下部の明褐色粘質土で時期は中世で、GL-1.15mの灰色粘土上面が中世の遺構面となる。この灰色粘土（層厚14cm）からは須恵器、土器等が出土し、古墳時代後期の遺物包含層とみられる。古墳時代後期の遺構面を確認することはできなかったが、GL-1.4mの灰茶色粘砂が古墳時代前期の遺構面となることがわかった。

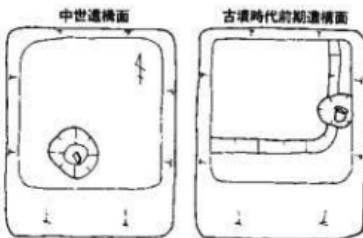
第2調査区でもほぼ同様の層序をしめすが、GL-1.4mで灰色砂混



第30図 調査地周辺図(1/5000)



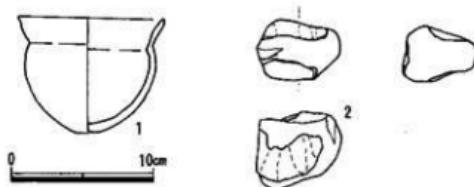
第31図 基本層序模式図 (1/40)



第32図 第1区平面図 (1/40)



第33図 調査区設定図 (1/800)



第34図 出土遺物実測図 (1/4)

粘土を切り込む暗褐色粘土がみられ、この下部の灰色粘砂層では須恵器、土師器含んでおり、第1調査区より若干落ち込んでいることが確認できた。

6. 遺構・遺物

〔第1調査区〕

灰色粘土上面で、ピットを1基検出した。径0.36mのほぼ円形を呈し、柱穴は径0.16mを測る。埋土より瓦器片が出土している。灰茶色粘砂上面でL字状に巡る溝を調査区の南側と東側で確認した。溝埋土には古墳時代初頭の遺物が微量だがみられた。また南側の溝の肩ではピットがみられ、庄内古相の小型壺1が出土した。

〔第2調査区〕

灰色粘土上面でピットを1基検出した。径0.38m、深さ0.16mを測る。遺物はみられない。2は用途不明土製品で、握ったような指頭痕がみられ、対面はなめらかな面をもつ。

7. 備考

本調査地の東と南に接する道路を八尾市文化財調査研究会が昭和62年度に区画整理に伴い発掘調査（第13次調査）を行っており、弥生時代後期から江戸時代にかけての遺構を検出しており、特に今回の調査でも遺物を多く出土した古墳時代前期の遺構は土坑8基、溝25条、土器集積1ピット55、自然河川1条と多くの遺構を検出している。（道）

8. 参考文献

助八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡－八尾市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査」1990年

8. 跡部遺跡（92-121）の調査

1. 調査地

跡部本町4丁目4-20

2. 調査期間

平成4年6月22日

3. 調査契機

鉄塔新設工事

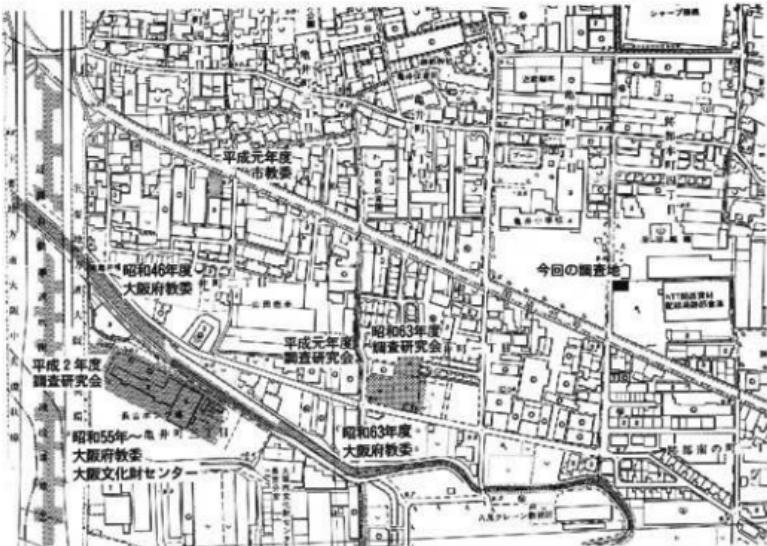
4. 調査方法

3m×3mの調査区を2カ所設定し、第1調査区を地表下約2mまで、第2調査区を地表下約3.8mまで掘削を行い、調査を行った。

5. 基本層序

地表下1.25mの⑦淡褐色粘砂上面が中・近世の包含層となる。そして第1調査区では、地表下1.75mの⑫暗茶灰色粘質土から7世紀代の遺物包含層でこの包含層の上部層は南壁では⑩暗灰色微砂がみられるが、他では⑪淡褐色粘砂でこの層中からは土師器、須恵器が若干出土している。

第2調査区では、地表下1.85mの⑬暗灰黄色粘質土と⑭暗茶灰色粘質土が7世紀の遺物包含層である。また、地表下3.4m付近の⑮灰黑色粘土では植物遺体に混じって、僅かながらも古墳時代前期に比定できる遺物が出土している。



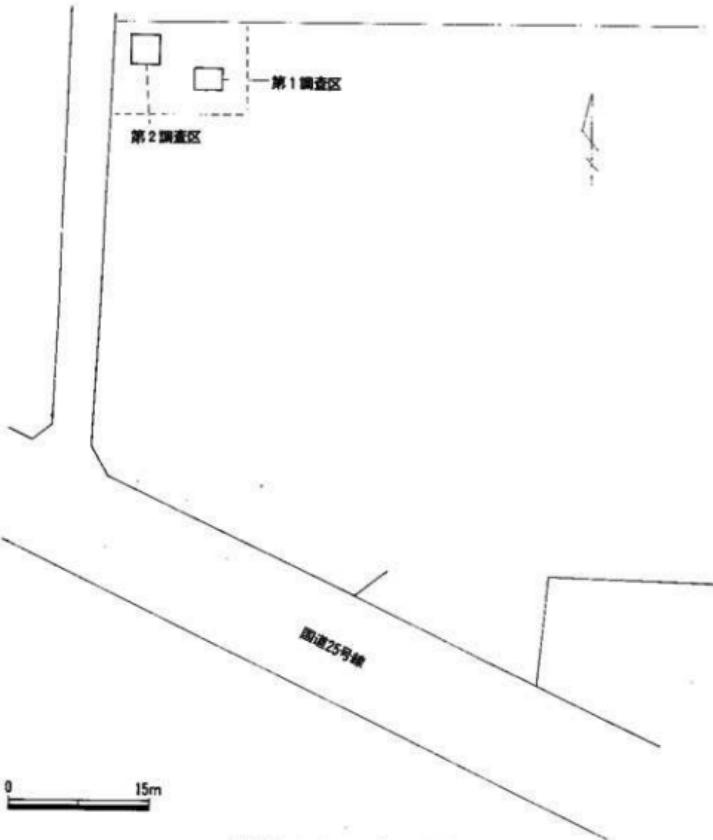
第35図 調査地周辺図 (1/5000)

6. 遺構・遺物

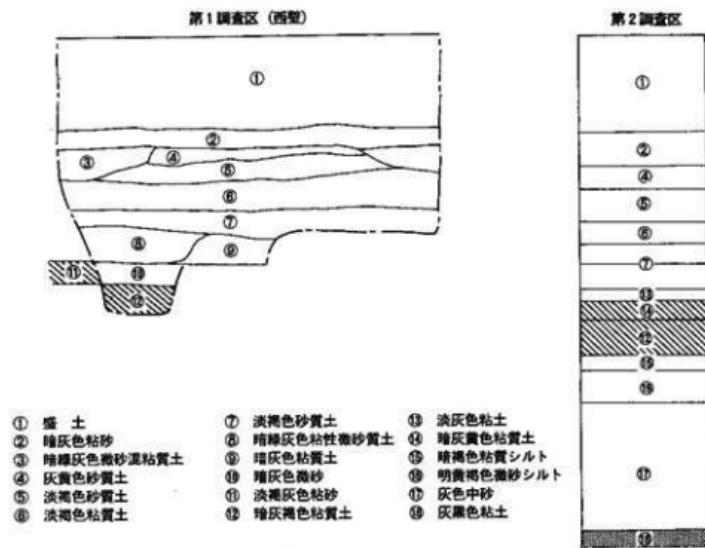
第1調査区では地表下 0.8mで島烟と思われる高まりがみられる。島烟は幅約 1.4~1.5mで、高さは0.3mである。

第2調査区では、⑩暗灰黄色粘質土上で灰色粘土を埋土とする溝状の遺構がみられた。

遺物は第2調査区で多く出土しており、⑪暗灰黄色粘質土ではかえりの付いた蓋杯、内外面ハケ調整された土師器片、鉢がみられる。⑫暗茶灰色粘土では土師器釜、杯、須恵器の杯身、瓶等が出土している。いずれも7世紀に比定できるものである。また、⑬灰黑色粘土では外面タタ



第36図 調査区設定図 (1/600)



第37図 土層断面図(1/40)

キメ、内面ヘラ削りを施す壺片と外面粗いタクキ、内面ナデ調整の壺片がみられ、古墳時代前期の遺物が僅かながら出土している。

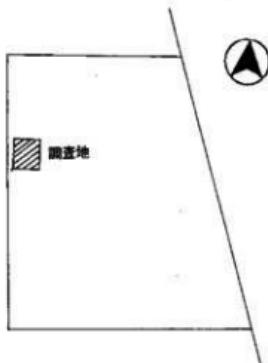
7. 備考 跡部は物部氏の一族である阿刀氏が治めていた場所といわれており、今回出土した遺物は7世紀に比定できることから、物部氏との関連も考えられよう。
(酒)

9. 小阪合遺跡（92-136）の調査

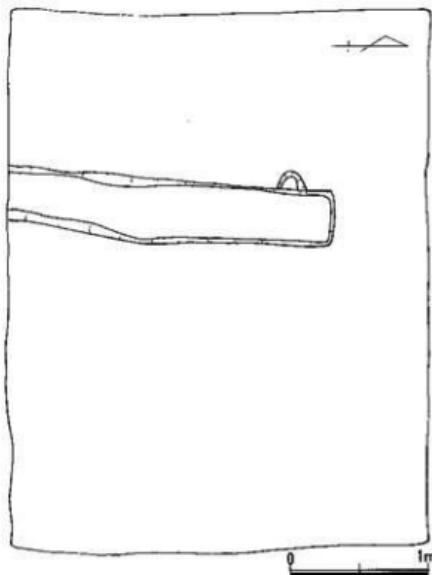
1. 調査地 若草町23-1、23-4他
2. 調査期間 平成4年6月26日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 3m四方の調査区を1ヶ所設定。地表下2.8mまで重機と人力を併用して掘削。
5. 基本層序 地表下1.1m、TP + 5.1mの淡灰褐色シルト質粘砂A層上面が中世（13C末頃）の遺構面になり、この層および地表下1.75mまで堆積する淡灰黄色炭混シルト質粘砂層等が、古墳時代以降の包含層であることを確認。
6. 検出遺構・遺物 淡灰褐色シルト質粘砂A層上面で溝1条、ビット1基を検出。これらから瓦器、土師器、須恵器の破片が出土した。
7. 備考 当調査区の東側でも中世の屋敷跡が確認されている。
(『八尾市文化財調査研究会『平成3年度事業報告』1992年』(吉田)



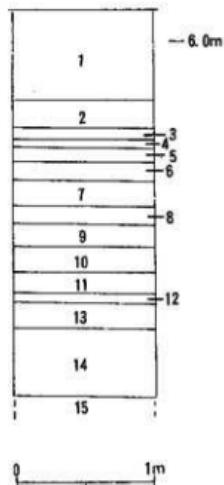
第38図 調査区位置図 (1/5000)



第39図 調査区設定図(1/600)



第40図 遺構平面図(1/40)

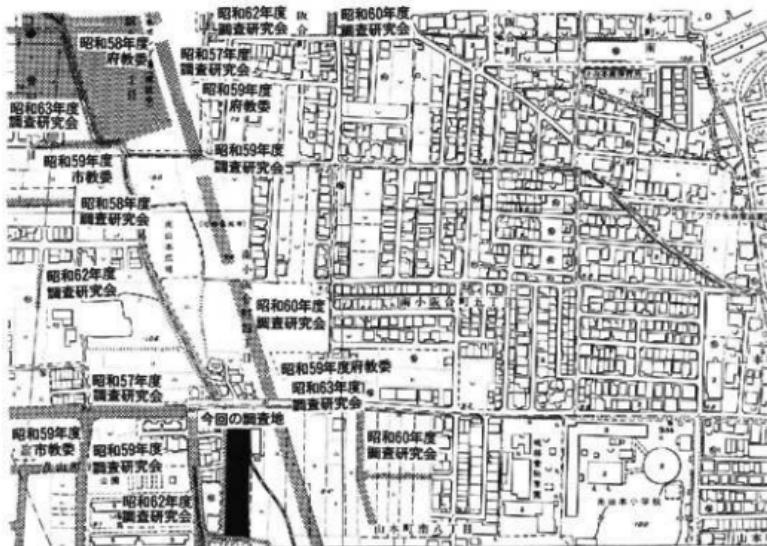


1. 黄土層（黄灰色砂層）
2. 農作土
3. 褐灰色粘砂層
4. 淡灰褐色粘砂層 — 中世土器包含層
5. 灰褐色粘砂層
6. 淡灰褐色シルト質粘砂A層 — 古墳時代～中世の
7. 淡灰褐色シルト質粘砂B層 土器包含層
8. 淡灰黄色炭化シルト層
9. 淡灰黄色炭化シルト層
10. 明淡灰黄色シルト層
11. 明淡灰黄色微砂シルト層
12. 灰色粘砂層
13. 淡灰色粗砂層
14. 青灰色砂質シルト層
15. 紫灰色粘土層

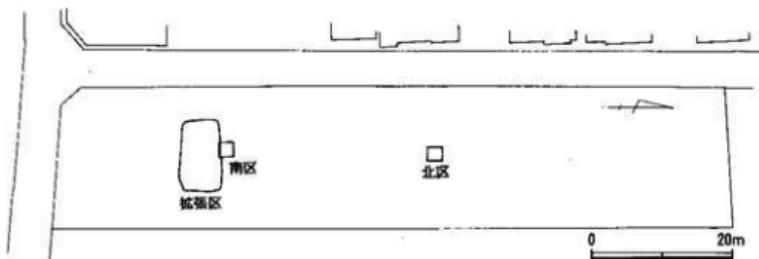
第41図 土層断面柱状図(1/40)

10. 小阪合遺跡 (92-143)の調査

1. 調査地 青山町5丁目3-1、3-2、4-1、4-2、山本町南8丁目203
2. 調査期間 平成4年6月29日、7月6~10日
3. 調査契機 共同住宅建設
4. 調査方法 第1次調査として6月29日に $2\text{m} \times 2\text{m}$ の調査区を2ヶ所設定し、遺構確認調査を実施した。その結果南側に設定した調査区で、地表下1.9m前後の灰黄色砂質シルト層を切り込むピットを確認した。しかし、遺物が稀少なこともあって時期を特定するには至らなかった。そのために申請者と協議を行い、遺構確認調査の継続と調査区の拡張を申し入れた。
- 継続調査は遺構が検出できた南調査区の南側に $6\text{m} \times 10\text{m}$ の調査区を設定し、遺物包含層と考えられる褐灰色粘質土が存する地表下1.6mまでを重機で掘削し、以下0.3mを重機と人力を併用して掘削し、調査を進めた。また、調査途中で検出された遺構が西壁面にかかるため、さらに調査区の拡張を行った。



第42図 調査地周辺図 (1/5000)



第43図 調査区設定図 (1/800)

5. 基本層序

第1層（暗褐色砂質土）表土及び盛土層で、近年の区画整理で地上げされたもので耕作土として利用されていた。

第2層（暗灰色粘砂）区画整理以前の耕作土である。

第3層（淡茶灰色砂質土）中近世の遺物を僅かに含むもので近世の耕作土である。

第4層（明黄灰色粘砂、暗黃灰色砂質土）いずれも瓦器、土師器の小破片を含む中世の遺物包含層である。

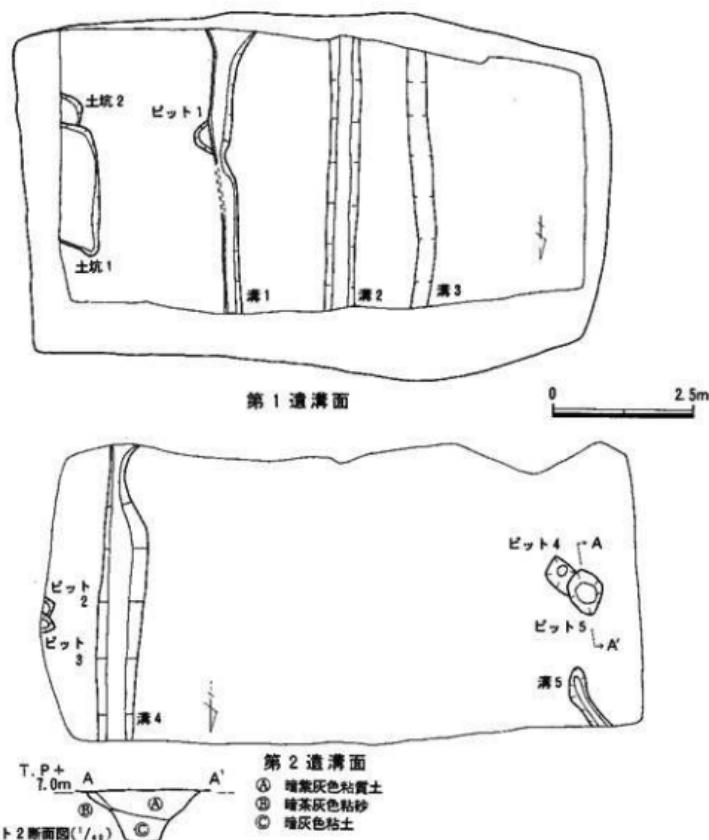
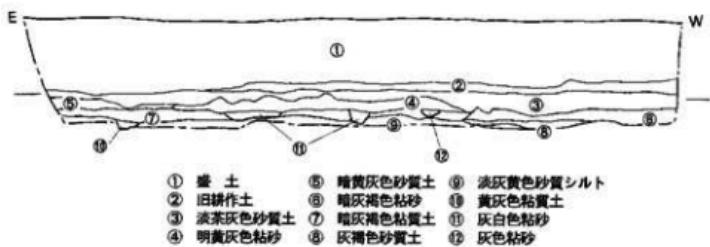
第5層（暗灰褐色粘質土、暗灰褐色粘砂）土師器、須恵器の破片を含む概ね7～8世紀代とみられる遺物包含層であり、この上面が中世の面となり、第1遺構面とした。

第6層（淡灰黃色砂質シルト、灰褐色砂質土）遺物を全く含まない層であり、この上面を第2遺構面とした。

6. 遺構・遺物

第1遺構面はGL-1.6m前後で検出できたもので、中世以降とみられる。遺構は、土坑状の掘り込み2基、溝3条、ピット1基である。この内遺物が出土したのは溝1からで、土師器、瓦器碗の小破片が溝埋土中よりみつかっている。溝はいずれも南北方向に伸びており、深さも10cm前後と浅いため耕作時の鎌溝であろう。

第2遺構面はGL-1.75m前後で、溝2条、ピット4基を検出しているピット3では須恵器の杯蓋片、土師器等が出土している。ピット5はピット4を切り込む形で検出でき、埋土は南区で確認できたピットと同じ暗紫灰色粘質土、暗茶灰色粘砂であった。深さは0.38m、幅0.78mを測る。しかし、南区のピットと同じく埋土中から遺物は見つからず、時期は明確にはできなかった。ただ同一面で検出できた溝4の埋土中から



第44図 平面及び断面図(1/100)



第45図 出土遺物実測図 (1/4)

7世紀代の須恵器の杯身（第45図1）が出土しており、また、遺構検出面の上部層である暗灰褐色粘質土から同時期の遺物（第45図2、3）が含まれることからピットの時期も6～7世紀初頭に比定できよう。

7. 備 考

今回の調査は南区でみられたピットの時期を明確にすること、またピットと関連する遺構を検出し、その性格を明らかにすることであった。このうち前者の時期については出土遺物からではあるが、一時期を押さえることができた。しかし、後者の関連する遺構についてはピットは検出できたがその性格を明らかにすることはできなかった。ただ拡張区でみつかったピットは柱穴とみられることから、掘立柱建物を構成する遺構である可能性が考えられる。この場合、出土遺物が少ないと倉庫施設などを考えることができるが、南区でみつかったピットと拡張区でみられたピットとの間隔がありすぎることから、それも明確ではない。本調査地の西側と南側に接する道路部分は財八尾市文化財調査研究会によって区画整理事業に伴い昭和62年度に調査が行われている。この調査では2時期の遺構面を検出している。第1面は弥生時代中期から古墳時代に、第2面は鎌倉時代から江戸時代に各々比定されている。この調査では古墳時代前期の井戸、小穴、溝が検出されていて、いずれも今回のピットとの関連をみつけることは難しい。

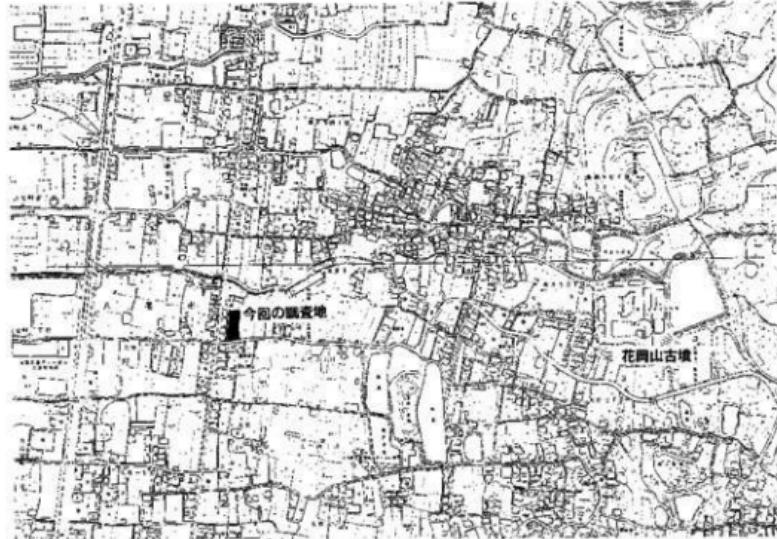
（潜）

8. 参考文献

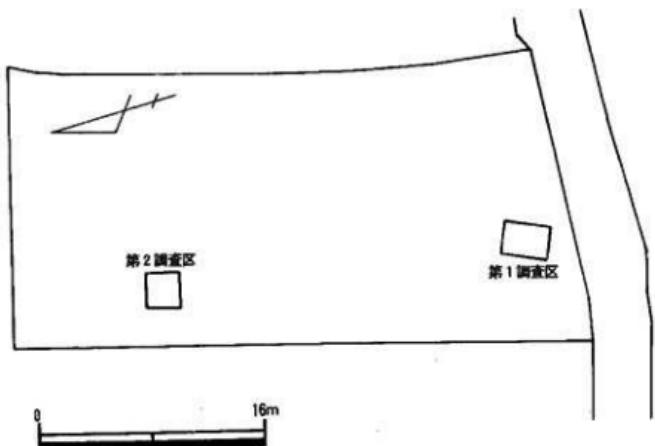
財八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡－八尾市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－」1990年

11. 大竹西遺跡 (92-063)の調査

1. 調査地 大竹5丁目66、67
2. 調査期間 平成4年7月21日
3. 調査契機 倉庫建設
4. 調査方法 事業計画地の南に3m×2mの第1調査区を、北に2.5m×2.5mの第2調査区を設定し、コンクリートと盛土(約0.6m)を機械で掘削した。そして、以下0.7~0.9mを人力で掘削を行った。
5. 基本層序 第1調査区 地表下0.75前後の③暗茶褐色小礫混粘砂層で須恵器の台付壺、地表下1.1m前後の暗赤褐色微砂質土上で溝とみられる“落ち”が確認できた。この暗赤褐色微砂質土層上面が遺構面になる。ただこの上部層である④層は“落ち”的肩付近で擾乱で破壊されており、本来はこの④層上面が遺構面となる可能性もある。溝埋土の下部⑥暗橙黄色砂疊では遺物は出土しておらず、地山と考えられる。
第2調査区 地表下0.6m付近で第1調査区では無かった旧耕作土が



第46図 調査地周辺図 (1/10000)



第47図 調査区設定図 (1/400)

あり、⑧暗淡緑灰色粘砂は床土とみられる。遺物は旧耕作土直下から出土しており、特に⑩茶褐色粘砂からは鉢釜、ミニチュアの高杯、土師器の杯、須恵器の台付壺等の破片の他に弥生土器、土師器の破片も多く出土している。そして、地表下0.88m前後の暗褐色粘砂が弥生時代末期の遺構面になる。

6. 遺構・遺物

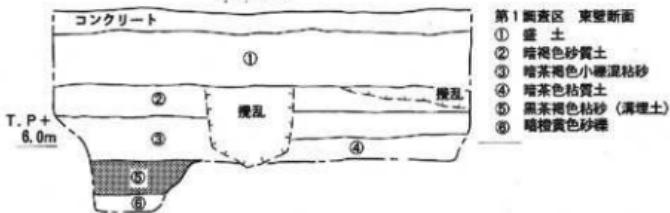
(清“落ち”)

第1調査区の地表下1.1m前後(TP+5.88m)の暗赤褐色微砂質土上面で南側の肩に検出した。検出長約2.2m、最大幅1.5m、深さ0.25mで、西南から東北に伸びるものと思われる。埋土は⑤黒茶褐色粘砂である。この埋土中より埴輪の一部と思われる破片(1、2)が出土している。(1)は外面に横方向のハケメが施されている。(2)は凸帯が巡っているが、断面突出土の低いものである。表面が磨耗しており、ハケメの有無はわからない。いずれも土師質で、色調は淡黄乳色を呈している。黒斑はみられない。

(註1)

昭和54年に当教育委員会が行った調査では本調査地から東約50mの地点で、中世の整地による2次堆積からではあったが円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪等の破片がコンテナ4箱分出土している。また、鏡塙古墳の埴丘上からもこれに類似する埴輪片が採取されている。これらの埴輪

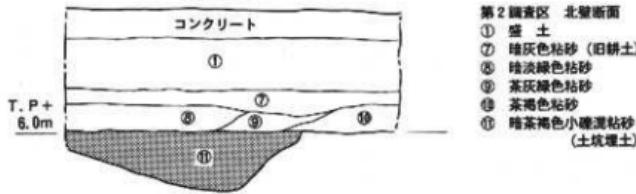
第1調査区



第1調査区 東壁断面

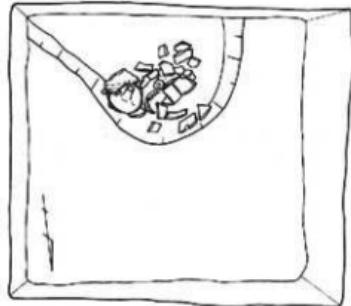
- ① 盛土
- ② 喀褐色砂質土
- ③ 喀茶褐色小礫混粘土
- ④ 喀茶色粘土
- ⑤ 黑茶褐色粘土 (溝埋土)
- ⑥ 喀橙黃色砂質土

第2調査区



第2調査区 北壁断面

- ① 盛土
- ⑦ 喀灰色粘土 (旧耕土)
- ⑧ 喀淡绿色粘土
- ⑨ 茶灰绿色粘土
- ⑩ 茶褐色粘土
- ⑪ 喀茶褐色小礫混粘土 (土坑埋土)



0 1m

第48図 平面及び断面図(1/40)

は一部にB種ヨコハケがみられるが、担当者は川西氏編年のV期前半に位置付けており、鏡塚古墳から持ち出されたものと推定している。

今回見つかった埴輪は小片で磨耗が激しく、時期は明確にしえないが、上述の埴輪との関連は十分に考えられよう。

〔土 坑〕

第2調査区の地表下0.88(TP + 6.0m)の暗褐色粘土をベースとしており、調査区の南東で検出できた。南側は調査区外に至るため全容は不明である。深さは0.42mを測る。北肩部分で弥生土器畿内第V様式末期に位置付けられる遺物(8~15)が出土している。(8)は広口壺の体部で外面にヘラミガキ、内面にハケ調整を施す。(11)は壺の、(12)は甕の底部である。(10、13)は鉢で、(13)は高台を有する。(9)は小型の甕とみられるが、外面に右上がりのタタキ調整を行った後ナデを施している。(14、15)は高杯で、(10)は杯部外表面にヘラミガキ調整、脚部にハケ調整を施し、4孔を穿つ。(15)は壺部で外面にヘラミガキを行い、また半截竹管文を二列に配している。

〔第1調査区、包含層出土遺物(3、4)〕

(3)は土師器の杯で口径13cmを測る。(4)は須恵器の台付き壺で底径11.9cmで、高台端面は凸状を成す。

〔第2調査区、包含層出土遺物(5~7)〕

(5)は手すくねの土師器の杯。(6)は高台付き壺で底径7.2cm、高台端面は外方にやや肥厚し、かぎ状に曲がる。(7)は土師器のミニチュア高杯である。

7. 位置と歴史環境 今回の調査地である大竹西遺跡は八尾市の北東部、大阪と奈良の県境となる生駒山の西麓に位置し、弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。遺跡は洪積世丘陵の間に形成された扇状地にあり、調査地の西は東高野街道と接する。

周辺には縄文時代から古墳時代にかけての多くの遺跡が存在する。本遺跡の北、東大阪市域では縄手遺跡、馬場川遺跡がある。いずれも縄文時代中期後半から集落が営まれ、住居跡が見つかっている。特に馬場川遺跡では後期前半に馬場川式(馬場川0式)と名付けられた独自の土器様式を持ち、また30余の土偶が出土したこと等で知られている。

弥生時代前期では縄手遺跡の他に八尾市域と東大阪市域に跨がる池島

(註4)
・福万寺遺跡で生産関連の遺構が検出されており、それに本遺跡でも前
(註5)
期の墓域を検出している。中期では池島・福万寺遺跡、本遺跡の南にあ
(註6)
る水越遺跡では溝や土坑から多数の遺物が出土している。後期は縄手遺跡、
(註7)
馬場川遺跡、上六万寺遺跡、北島池遺跡（東大阪市）や本遺跡の東にあ
(註8)
(註9)
る花岡山遺跡、大竹遺跡、南にある太田川遺跡、水越遺跡、池島・福万
(註10)
寺遺跡（八尾市）等を挙げることができる。

また、周辺には古墳も多くみられる。本調査地の東、山麓の独立丘陵
には前期、中期、後期の各時期の古墳によって構成される楽音寺・大竹
古墳群が存在する。前期には西ノ山古墳、花岡山古墳、向山古墳の三基
の前方後円墳が築造され、中期には花岡山、向山古墳より 300m 西に下
(註11)
った地点に中河内最大級の前方後円墳である心合寺山古墳が造られる。
また、前期の 3 基の古墳より上方、標高 150m に男女 2 体が合葬され
(註12)
た中ノ谷古墳があり、そして、今回の調査地点の南、約 40m には鏡塚古
墳がある。後期では標高 80m に大阪府下でも最大級の横穴式室をもつ
(註13)
愛宕塚古墳が造られる。この歴代の首長墓ともいえる楽音寺・大竹古墳
群も愛宕塚古墳の築造を最後に、古墳の築造は尾根上に中心を移し、府
下最大の群集墳である高安千塚が形成される。

8. まとめ

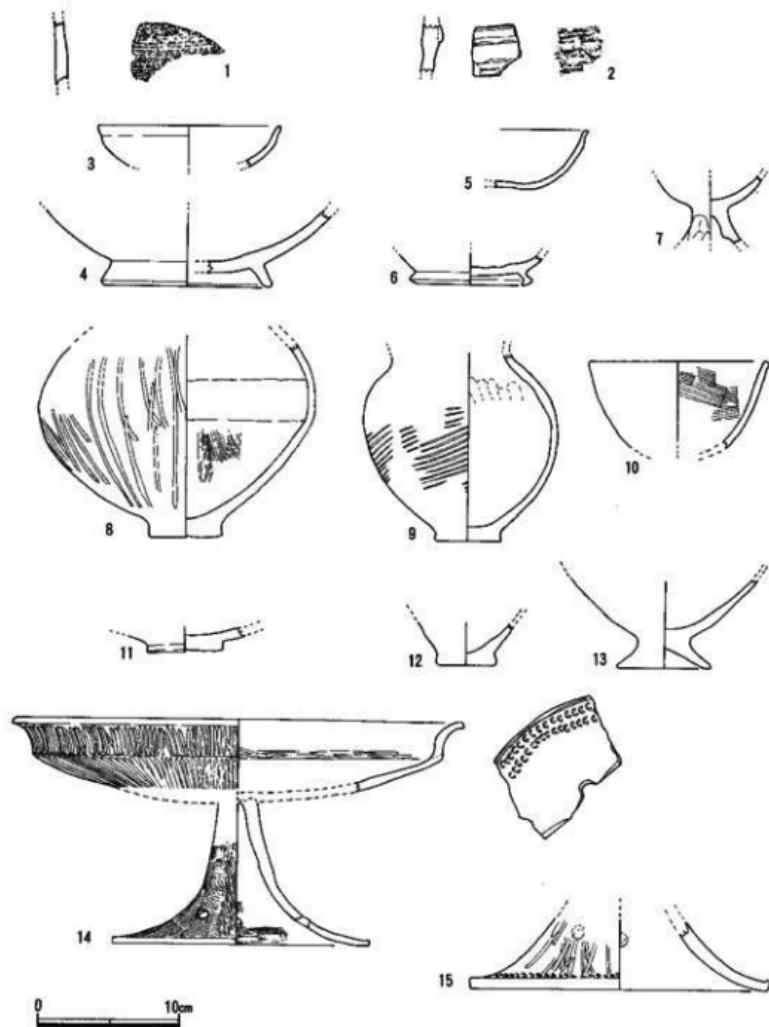
本調査で検出できた“溝”であるがこれは鏡塚古墳との関連で考えら
れないだろうか。鏡塚古墳は松山・腹痛山とも呼ばれ、府史跡に指定さ
れているが、採土のため墳丘の破壊が著しい。このため、現状では径約
28m、高さ約 5 m の円墳とみられているが、前方後円墳の可能性も否定
されていない。今回検出できた溝は東西に伸びるものであり、鏡塚古墳
が從来推定されているように南北に主軸をもつ前方後円墳であるとする
ならば、溝は前方部を巡る周濠の一部であることも想定できる。もし、
このような想定が可能ならば鏡塚古墳は北面する全長約 50~60m の前方
後円墳として復元できる。しかし、昭和 54 年に当教委員会が行った調査
では今回の第 1 調査区より約 10m 東にトレーニングを設定していたが周濠ら
しきものは確認されていない。また今回の調査でも溝内からの遺物は磨
耗した埴輪片のみであり、周濠と確証でのるものではない。ただ、今回
の溝はその層位、出土遺物等から 8 世紀を下るものではなく、鏡塚古墳
が周濠を有する前方後円墳である可能性を残したということに留めてお
きたい。

第2調査区で見つかった弥生時代末期の遺構については、上述の歴史環境でみたように周辺では多くの遺構が確認されていることから予想されていたが、扇状地先端部でG L -0.88mで良好な形で検出できたことは周辺での今後の調査に注意を要する。

また、包含層出土の須恵器の台付き壺について述べておく。奈良～鎌倉時代に心合寺山古墳の南西に秦一族の氏寺といわれる心合寺（秦興寺）^(註14)が存在したと推定されている。この心合寺周辺の花岡山、心合寺山古墳では奈良時代の藏骨器と考えられる台付有蓋短頸壺が出土している。鏡塚古墳でも藏骨器が出土したと言われており、火葬跡が2カ所見つかっている。これらは秦一族に関係する人々の火葬墓と考えられている。そして、今回出土した台付き壺も心合寺と秦一族に何らかの関連をもつものと推定できよう。

8. 参考文献

- （註1）八尾市教育委員会『大竹遺跡』1980
- （註2）繩手遺跡調査会『繩手遺跡1』1971
- 東大阪市遺跡保護調査会『繩手遺跡2』1976
- （註3）東大阪市教育委員会『馬場川遺跡IV』1976
- （註4）鶴八尾市文化財調査研究会『平成3年度事業報告』1992
- （註5）鶴大阪文化財センター『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』1992
- （註6）鶴八尾市文化財調査研究会『平成元年度年報』1989
- （註7）東大阪市遺跡保護調査会『東大阪市遺跡保護調査会年報I』1975
- （註8）大阪府立花園高校地歴部『河内古代遺跡の研究』1970
- （註9）花岡山学術調査団『河内花岡山遺跡』大阪経済法科大学考古学研究報告第9集1988
- （註10）八尾市教育委員会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和56・57年』1983
- （註11）八尾市教育委員会『八尾市文化財紀要6』1992
- （註12）原田修・久貝健・島田和子「清原得巖所蔵考古資料図録」『大阪文化誌6号』第二卷 第二号1976 鶴大阪文化財センター
- （註13）大阪府教育委員会「八尾市高安群集墳の調査（第2次）」『大阪文化財調査概要1968年度』
- （註14）前項（註12）



第49図 出土遺物実測図 (1/4)

12. 竹淵遺跡（92-145）の調査

1. 調査地 竹淵東3丁目
2. 調査期間 平成4年8月20日
3. 調査契機 工場建設
4. 調査方法 3m四方の調査区を北と南に設定。北調査区では地表下2.4mまで、南調査区では地表下3.1mまで重機と人力を併用して掘削。
5. 基本層序 〔北調査区〕地表下0.7mの淡茶灰色砂混粘土層上面で平安時代後期と思われる土坑を検出。地表下1.9m～2.5mで弥生式土器、石器片を含む暗灰色砂混粘土層等を確認。
〔南調査区〕地表下0.7m前後で北調査区の平安時代の包含層に対応する茶灰白色粘質シルト層を、地表下2.2m～3.1mで北調査区と対応する弥生式土器等を含む土層を確認。
6. 検出遺構・遺物 〔北調査区〕土坑状遺構-0.86m×0.58mの隅丸方形。深さは最も深い部分で0.07m、埋土は灰紫色炭混粘土層。土師器高台付碗片、羽釜片、小皿片、丸瓦片等出土。
暗灰色砂混粘土層-弥生土器小片

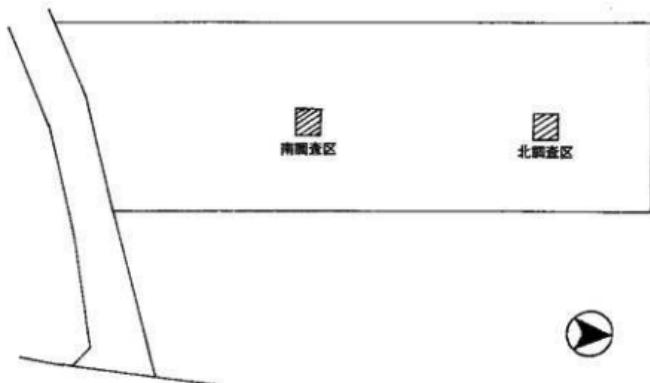


第50図 調査区位置図 (1/5000)

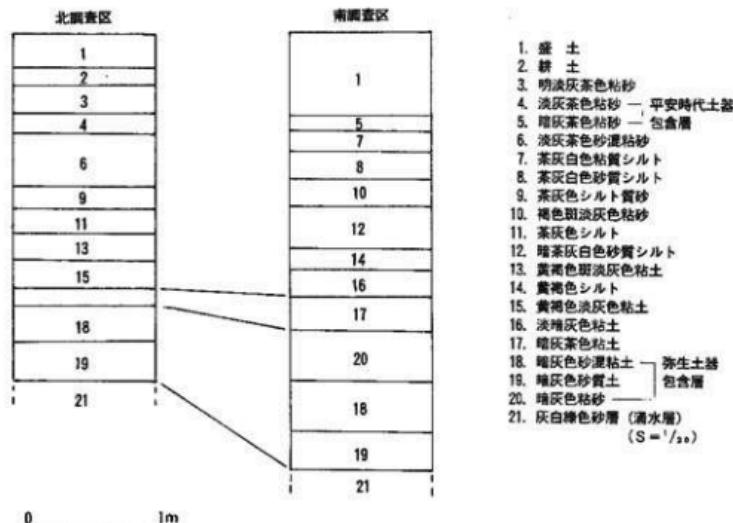
〔南調査区〕暗灰色砂混粘砂層－弥生上器小片

7. 備 考

当調査地の東側の亀井遺跡では弥生時代後期の集落跡と思われる遺構、遺物が非常に高い密度で確認されており（大阪府教育委員会・御大阪府文化財センター『亀井遺跡』1982他）これとのつながりが想定される。



第51図 調査区設定図



第52図 土層断面柱状図(1/40)

13. 小阪合遺跡（92-275）の調査

1. 調査地 青山町5丁目79-1

2. 調査期間 平成4年8月21日

3. 調査契機 共同住宅建設

4. 調査方法 調査地の東西に2m×3mの調査区を2カ所設定し、地表下2.5m～2.5mまでを調査対象とした。

5. 基本層序 第1調査区（西側）ではGL-1.25m (TP + 7.9m) の淡青緑灰色粘砂から瓦器、土師器等が出土しており、GL-1.35m (TP + 7.7m) の淡褐色粘砂が中世の遺構面になり、溝1条を検出している。そして、GL-1.57m (TP + 7.5m～7.7m) の灰白色粗砂混粘砂～灰黄褐色粗砂混粘質土で、古墳時代後期の遺物が出土している。GL-1.95m (TP + 7.2m) 以下では遺物はみられない。

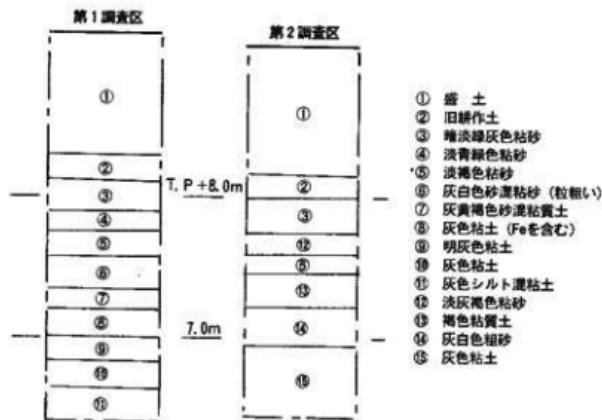
第2調査区ではGL-1.3mの淡灰褐色粘砂層が中世の包含層になるとみられるが、古墳時代の包含層は確認できず、GL-1.85mでは灰白



第53図 調査地周辺図 (1/5000)



第54図 調査区設定図 (1/400)



第55図 基本層序模式図 (1/400)

色粗砂を埋土とする流路がみられ、弥生時代末から古墳時代にかけての遺物が含まれている。

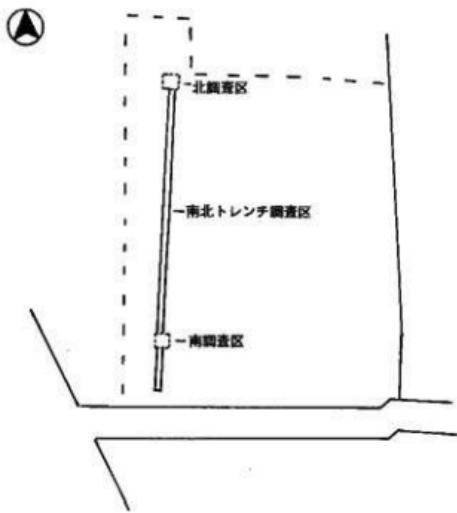
6. 造構・遺物 弥生土器、土師器、瓦器がビニール袋に一包み出土している。(道)

14. 萱振遺跡 (91-166)の調査

1. 調査地 楠根町4丁目
2. 調査期間 平成4年8月27日、28日
3. 調査契機 倉庫及び事務所建設
4. 調査方法 施工予定地の西側の北と南に3m四方の調査区を2ヶ所に設定。さらに2つの調査区を結ぶかたちで幅1m、長さ57mのトレンチを設定し、断面調査を行った。
5. 基本層序
〔北調査区〕 地表下0.2m~0.57mで古墳時代の土器片を含む褐色粘砂層がやや高まりをなす土層を確認した。
〔南調査区〕 地表下1.2m~1.4mでサヌカイト製と思われる石器の剥片が出土した。
〔南北トレンチ調査区〕 北側を中心に表土直下の地表下約0.2mの黄褐色粘砂層およびこの下に堆積する灰茶褐色小礫混粘砂層等の上面で、そ



第56図 調査地周辺図 (1/5000)

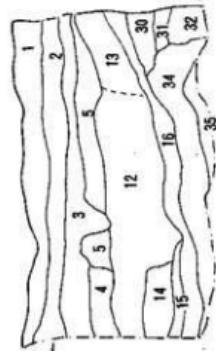
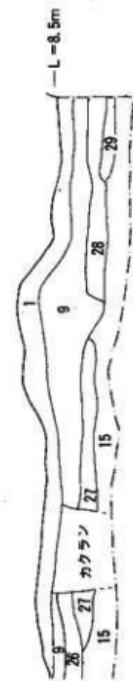
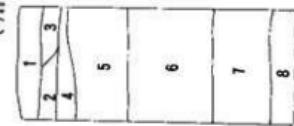


第57図 調査区設定図 (1/1000)

れぞれ古墳時代の土器片を含む土壤状遺構を確認した。また、南側では地表下 0.4m~ 0.6mで土師器を含む土層を確認しており、この下は地表下 1.2mまで灰褐色シルト質粗砂層等が堆積し、この下には暗灰色有機物混粘砂層が堆積する。

6. 検出遺構・遺物 南北トレンチ調査区で土壤状遺構を 4 基確認した。このうち地表下 0.2 m~ 0.3mの暗灰茶色砂質土層上面及び、灰茶色小礫混粘砂層等をベースとする遺構面で検出した土壤からは、古墳時代前期頃の土師器小片が出土している。
(吉田)

南北トレーンチ 西壁

北グリット土層柱状圖
(1/4)

1. 基土層
2. 細作土層
3. 民色泥砂層
4. 黄褐色泥砂層
5. 黄茶色粘砂層 (土器片多く含む)
6. 黄褐色粘質土
7. 黄灰茶色粘土 - 土灰質土
8. 黄灰茶色粘土 -
9. 黄褐色小礫混入砂層
10. 黄褐色粘土 - 土灰質土
11. 黄褐色粘質土層
12. 黄褐色シルト粘砂層
13. 黄灰白色シルト質粘砂層
14. 黄白褐色シルト -
15. 黄白褐色細砂層
16. 黄褐色シルト層
17. 黄褐色砂質土層
18. 黄褐色粘砂層

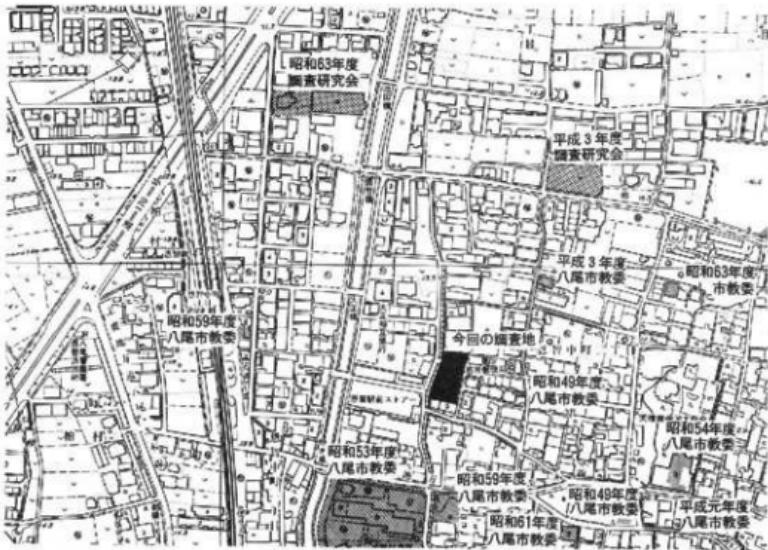
19. 黄褐色粘砂層 (土灰質土)
20. 黄灰茶色粘砂層
21. 黄茶色粘砂層
22. 黄褐色粘砂層 (土器片多く含む)
23. 黄褐色粘砂層
24. 黄褐色粘砂層
25. 黄褐色粘砂層
26. 黄褐色粘砂層
27. 黄褐色粘砂層
28. 黄褐色粘砂層
29. 黄褐色粘砂層
30. 黄褐色シルト質粘砂層
31. 黄褐色シルト質粘砂層
32. 黄灰白色粘砂層
33. 黄褐色粘砂層
34. 黄褐色シルト層
35. 黄褐色粘砂層

1. 土
2. 暗褐色粘砂層 - 土層岩片
3. 灰褐色粘砂層 - 含C
4. 暗褐色粘砂層
5. 暗白細砂層
6. 暗灰白粗砂層
7. 青灰色粘砂層
8. 青灰色有機物粘土層

第58図 土層断面図 (縦方向1/40、横方向1/200)

15. 恩智遺跡 (92-352)の調査

1. 調査地 恩智中町 2 丁目245-2
2. 調査期間 平成4年10月6日
3. 調査契機 遺構確認調査
4. 調査方法 3m四方の調査区を4ヶ所に設定。北調査区では地表下1.6mまで、東調査区、西調査区では地表下1.9mまで、南調査区では地表下2.6mまで重機と人力を併用して掘削。
5. 基本層序
〔北調査区〕地表下1.1m、TP + 3.2mで弥生時代の遺構面である暗灰色粘砂層を確認。暗灰色粘砂層は弥生土器、石器の包含層であり、この上に堆積する暗灰青色粘砂層等も同様の包含層である。
〔東調査区〕地表下1.2m、TP + 3.1mの暗灰色粘砂層上面で北調査区で確認した弥生時代の遺構面、包含層を確認した。ここでは暗灰色粘砂層は0.4mに及ぶ。



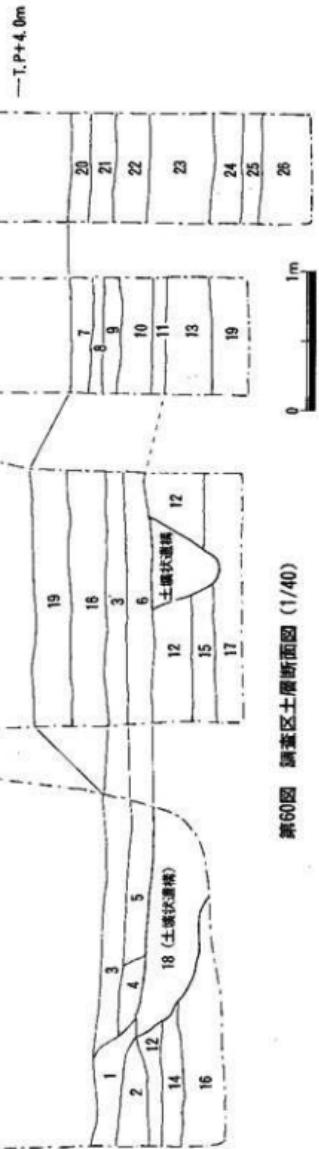
第59図 調査地周辺図 (1/5000)

南調查區

西調查區

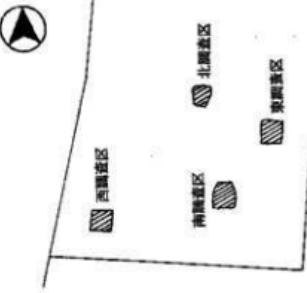
東調查區

北調查區

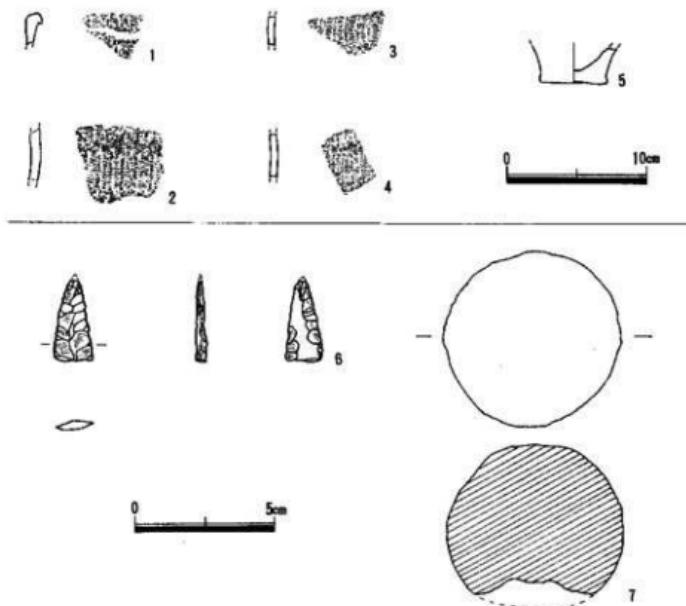


第60圖 調查區土壤剖面圖 (1/40)

- 61 -



第61圖 調查區設定圖 (S = 1/600)



第62図 出土遺物実測図（土器1/4、石器1/2）

- 1.（東調査区 土壌状遺構出土土器） 2~5（東調査区 あげ土出土土器）
- 6.（東調査区 土壌状遺構出土石器） 7.（あげ土出土石器状遺物）

〔西調査区〕地表下 1.3m、T P + 4.0mで北調査区、東調査区で確認した弥生時代の遺構が構築された層と対応する可能性をもつ黒灰茶白色小礫混粘砂層を確認。

〔南調査区〕近現代の擾乱著しく、遺構、遺物確認できず。

6. 検出遺構・遺物 〔北調査区〕幅 1.6m以上、深さ 0.4m以上の溝または土坑状遺構。弥生式土器、石器剥片他が密に出土。

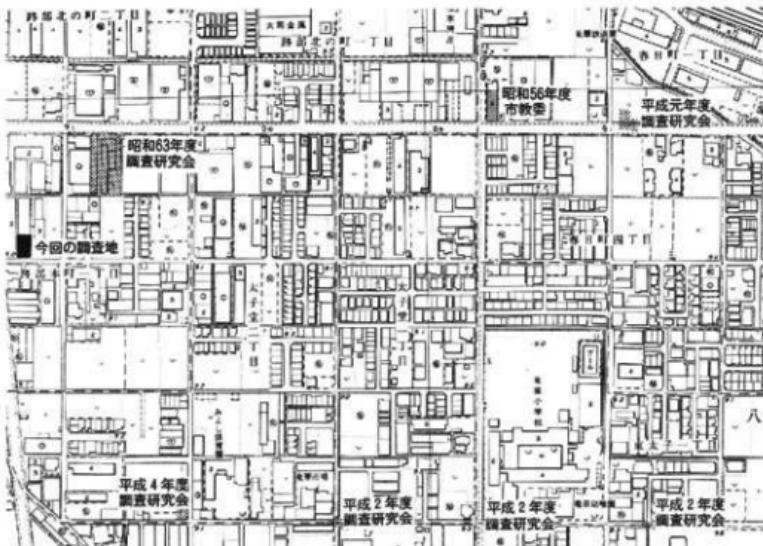
〔南調査区〕幅 0.6m、深さ 0.48mの土坑状遺構。弥生式土器、石器剥片他が密に出土

7. 備考 当調査地では弥生時代中期の遺構、包含層が非常に高い密度で存在することを確認した。これは天王の社を中心に拡がる弥生時代中期の集落跡の一端と捉えられるものであろう。 （吉田）

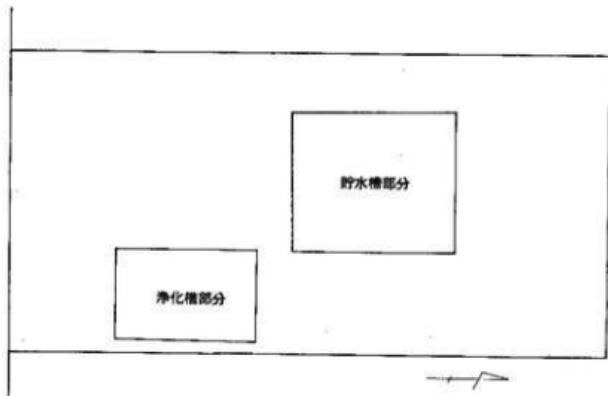
16. 跡部遺跡（92-164）の調査

1. 調査地 跡部本町1丁目4番47号
2. 調査期間 平成4年7月6日、10月27～29日
3. 調査契機 マンション建設
4. 調査方法 第1次調査は事業計画地にまた既存建物があった時点で、1.7m×2.3mの調査区を南西隅（第2次調査で実施した浄化槽部分の調査の西隣に当たる）に1ヵ所設定し、地表下2.9mまで掘削、調査を行った。しかし、遺構・遺物等を検出することはできなかった。けれども調査地周辺ではこれまで多くの遺構が見つかっているため、工事着手時に再度立会い、調査を行うこととした。

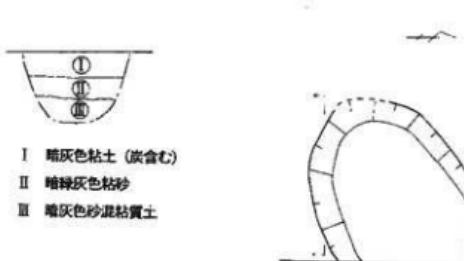
第2次調査は10m×11.5mの貯水槽掘削部分でまず実施した。その結果、GL-2.5mの暗緑灰色シルト混粘土層上面で古墳時代前期の井戸を検出したため、申請者と協議し、急遽調査に入る事となった。また貯水槽の南側に浄化槽を設置することが判明したので、3.3m×5.0m



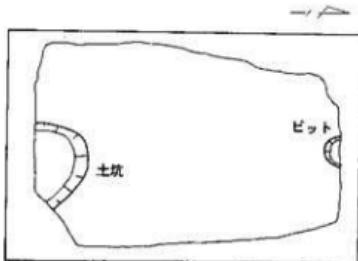
第63図 調査地周辺図 (1/5000)



第64図 調査区設定図 (1/800)



第65図 井戸 平・断面図(1/40)



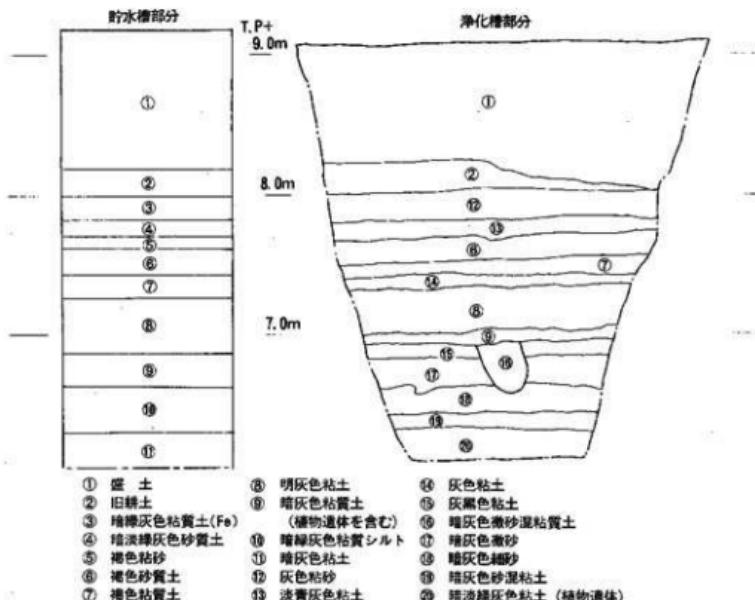
第66図 第2調査区 平面図 (1/80)

の調査区を設定して、G.L. - 1.9mまでを重機で掘削し、以下約1mを人力のみで掘削、調査を行った。

5. 基本層序

旧耕作土はG.L. - 1m前後でみられる。以下約0.37mの厚さで淡青灰色～暗緑灰色の粘砂、粘土が堆積する。このうちG.L. - 1.3mの③淡灰色粘土は第1次調査で鞋畔を確認しており、近世の耕作面となるとみられる。G.L. - 1.55m前後から2.45mまでは褐色砂質土～粘質土、明灰色粘土が堆積しているが、いずれの層でも遺構、遺物等を確認することはできなかった。

そして、G.L. - 2.2～2.3m (T.P. + 6.9m前後) にみられる⑨暗灰色粘土が遺物包含層になり、庄内甕、布留系甕、直口甕等の破片が出土している。また⑨層には植物遺体が多く含まれている。⑨層は北側では約0.25mの厚さで堆積しているが、南に向かうにつれて薄くなり、遺物もあまりみられなくなる。



第67図 基本層序模式図 (1/40)

⑩の下部層が遺構面になるが、貯水槽部分ではGL-2.55m(TP+6.64m)の⑪暗緑灰色粘質シルトがベースとなり、浄化槽部分ではGL-2.15m(TP+6.94)の⑫灰黒色粘土が遺構面のベースとなる。検出遺構は貯水槽部分では井戸1基、不明遺構(SX-01)、浄化槽部分ではピット1基、土坑1基である。

遺構面のベースとなっている⑬層、⑭層とともに遺物包含層であり、⑬層では庄内甕や複合口縁壺(36~38)ともに長細い方形の木製品なども一緒に出土している。また、⑮層では土師器片が若干出土している。⑯層は幅厚0.32m、⑯層は0.1mである。これらの包含層の下部層となる⑰暗灰色粘質シルト、⑱暗灰色微砂のいずれも遺構を検出することはできなかった。

6. 遺構・遺物

〔井戸〕

⑩暗緑灰色粘質シルト上面がベースとなり、貯水槽部分東北隅で検出した。そのため遺構の一部が調査区外に至るため、全容は不明であるが、やや梢円形を呈すると思われる。最大幅1.15m、検出長1.45m、深さ0.58m。埋土はⅠ暗灰色粘土(炭含む)Ⅱ暗緑灰色細砂Ⅲ暗灰色砂混粘質土の3層にわけられる。このうち遺物が出土したのはⅠ層とⅡ層で庄内甕、布留系甕、有段鉢、小型器台、高杯、小型壺等(1~32)が出土している。Ⅰ層とⅡ層の遺物は接合が可能であり、少なくともⅠ層とⅡ層で同時期に遺物が投棄され、井戸が埋められたと考えられる。

〔不明遺構(SX-01)〕

貯水槽部分、東壁断面で検出した。⑩暗緑灰色粘質シルト層中に直口壺、小型壺、甕底部(33~35)がかたまって、出土しており、特に直口壺は逆さまになった状態で完形で見つかっている。しかし、明確な遺構の切り込みは確認できなかった。なお、此の遺構の下部では暗灰色細砂層があり、木杭がみられた。暗灰色細砂層は南壁と西壁の一部でも確認でき東南から西南に伸びる溝があったことが推定される。

〔ピット〕

⑯灰黒色粘土をベースとしており、浄化槽部分、北側隅で検出した。遺構の一部は調査区外に至る。径約0.32m、深さ0.37m。埋土は暗灰色微砂混粘質土で、僅かに土師器片が出土している。

〔土 坑〕

やはり、⑩灰黒色粘土をベースとしており、浄化槽部分、南側で検出した。遺構の大半は調査区外に伸びるため全容は不明であるが、検出部分は半円形を呈し、検出長東西0.62m、南北0.37m。埋土は暗灰色砂混粘土で、布留甕の破片が出土している。

〔井戸出土遺物〕

井戸からはコンテナに3箱の遺物が出土している。このうち図化したのが(1~32)であるが、器種別では甕が最も多く出土している。

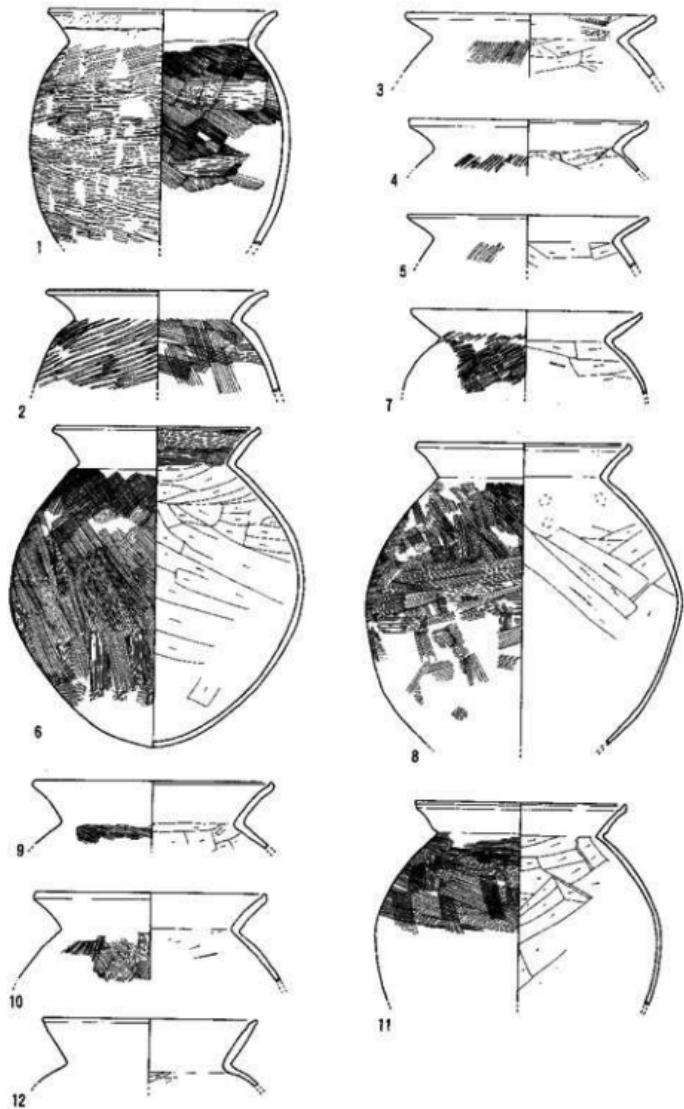
(1~2)は共に外面にタタキ、内面にハケメを施すが、(1)は4方向に細かいタタキがみられ、ハケメも大小を使用している。口縁は難き目が明瞭に残る。(3~6)はいずれも「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端部はつまみ上げるか、角張っている。外面は細筋のタタキを、内面は頸部までヘラケズリを施す。(7~12)は「く」の字に外反する口縁を有し、端部は小さくつまみ上げる。外面はハケメ調整し、内面は(8)を除いて頸部までヘラケズリする。(7)は体部は倒卵形を呈し、縱方向のハケ調整を行い、内面は口縁に横ハケ、体部はヘラケズリを施す。(13)は外面に右上がりの粗いタタキの後に左上がるハケメを、上部には縦ハケメを施す、内面はヘラケズリで下半は後にナデを行う。(14~17)は内湾する口縁を持ち、端部は肥厚し、内傾する面を有するもの、水平な面を有するもの等がある。外面は横ハケを施すものが多く、内面は頸部よりやや下からヘラケズリを施す。

(1~2)は弥生時代第V様式の系譜をひく甕、(3~6)は庄内甕(7~12)は布留傾向甕、(14~17)は定形化した布留甕に分類されよう。

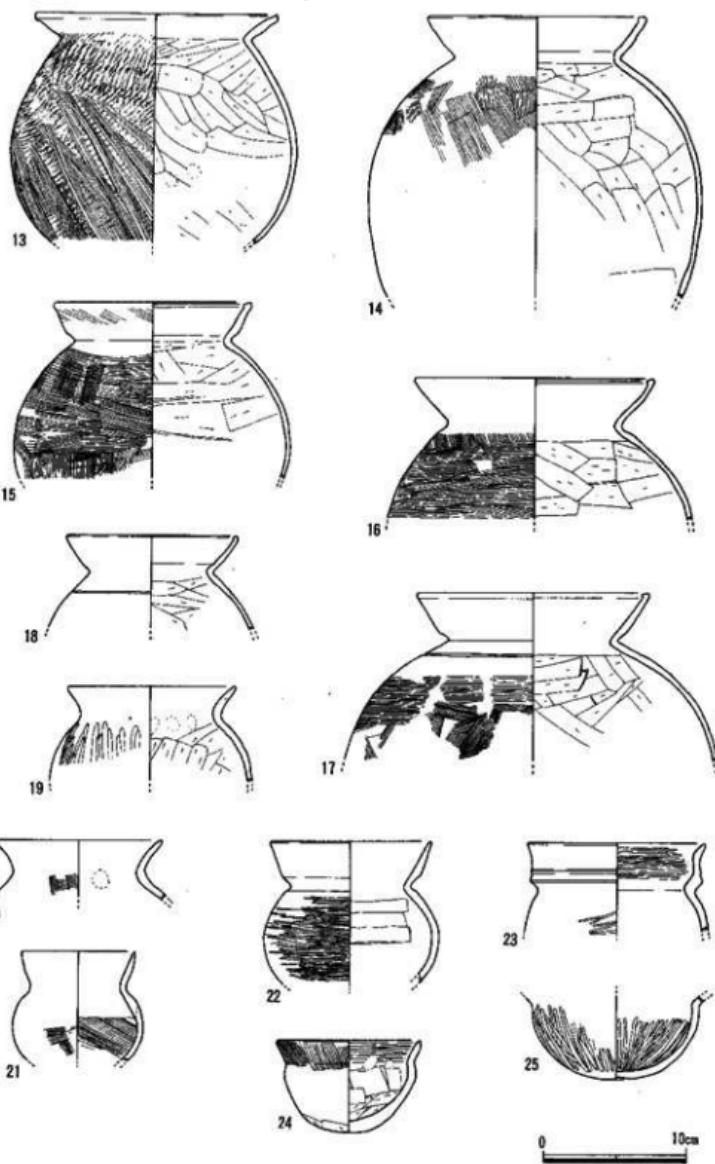
(23)は屈曲して外傾した後直立する口縁を有する。外面及び内面口縁部をヘラミガキする。山陰系。(25)は凹底を持ち、内外面に縦方向のヘラミガキをする。また体部外面に赤色顔料を施す。(26~29)の有段鉢は横方向のヘラミガキを密に施し、いずれも完形の状態で出土している。(30)の高杯は出土遺物中この有段高杯の杯部1点のみである。(31)は受部と脚部が貫通しており、外面と受部内面に横方向のヘラミガキを施す。

〔S X - 0 1〕

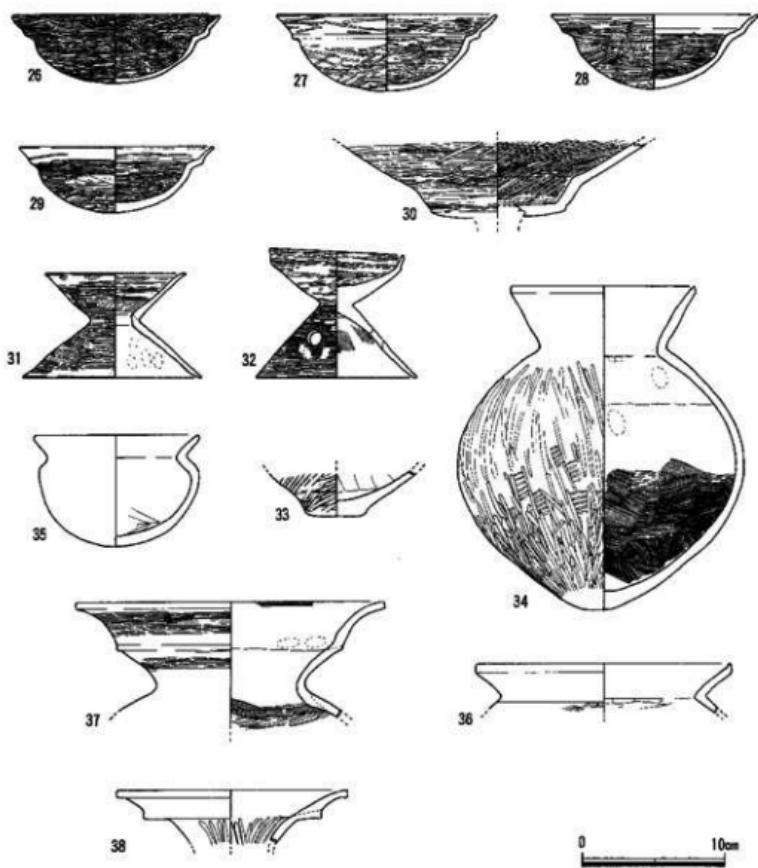
(33~35)で、(33)は平底で外面タタキ、内面はイタナデ。V様式甕



第68図 井戸出土遺物実測図 (1/4)



第69図 井戸出土遺物実測図 (1/4)



第70図 井戸出土遺物実測図 (26~32)、S X - 01(33~35)
暗緑色粘土 (36~38)

の底部である。(34)は球形の体部に尖り底をもつ広口壺で、タタキの後にタテ方向のヘラガミを施し、内面は下半部はハケメ調整、上半部はナデを行う。

[暗緑灰色粘質土出土遺物]

(36～39)で、(37)の複合口縁壺は外面ハケメ、内面は頸部下にハケメをし、口縁部はナデを行う。灰白色を呈し、胎土中に多くの砂礫を含む。摂津系。

7. 井戸出土遺物について 井戸出土遺物の特徴については次の5つを挙げることができる。

1. 壺の出土量が6～7割を占める。
2. V様式系壺、庄内壺、布留傾向壺、布留壺と壺のバリエーションが豊富である。
3. 赤色顔料を施した鉢が出土している。
4. 小型丸底壺、小型鉢、小型器台から成る小型3種が揃っている。

以上の特徴を踏まえたうえで、井戸出土遺物の位置付けを行いたい。井戸は3層に分かれるが、遺物はI層とII層で出土しており、I・II層での接合が可能である。その意味で上記の2と3が本遺構の位置付けを考えるうえで重要である。壺は4種類があるが、定型化した布留壺が多く出土していることと、また小型鉢、小型器台、小型丸底壺からなる小型3種が揃っていることから、井戸出土遺物は布留式期に包括される。だが、庄内壺と布留傾向壺がみられ、とくに庄内から布留式期への過渡期的形態をもつ布留傾向壺が最も多く出土していることから、布留式の最古段階の範疇に位置付けられよう。そして、それは中河内の土器編年では「壹振井戸S E 0 3」併行期にあたり、米田氏の編年では「布留式期I」に包括される。

次に3・4から遺物の性格について触れておく。赤色顔料は鉢の外面に塗布され、胎土は角閃石を多く含むがそれ以外の砂粒は目立たない。他の壺、鉢、器台等とは異なる胎土をしている。

小型器台、小型丸底壺、小型鉢から成る小型3種は少なくとも1セットは揃っている。小型丸底壺は1個体であるが、小型鉢（有段鉢）は4個体、小型器台はタイプの異なるものが1種類ずつ、2個体出土している。

これらは日常生活で使用されたものではなく、何らかの祭祀に伴って使

用されたと考えられる。しかし、それが井戸そのものを祀るものであるのか、井戸を廃棄する祭祀に伴うものであるのか、また井戸以外の祭祀を行った後は井戸に投棄されたものであるのか等の、祭祀の目的、投棄却の動機については不明である。今後の周辺の地域の集落跡の調査や井戸資料の蓄積によって明らかになることを期待する。

8. ま と め

今回の調査は工事着手時の緊急調査という不幸な状況下で行ったものであったが、古墳時代前期の井戸、ピット、土坑等が検出できた。とくに井戸は庄内式から布留式への過渡期に位置するものであり、この時期の土器組成を考える上で重要である。 (清)

9. 参 考 文 献

- 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要Ⅰ』1983
大野薰「萱振遺跡SE03出土土器について」『八尾市文化財紀要3』
八尾市教育委員会1988
大野薰「大阪府萱振遺跡出土の古墳時代前期土器」『庄内式土器研究
Ⅰ』庄内式土器研究会1992
米田敏幸「中南河内の『布留系』土器群について」『考古学論集第3
集』考古学を学ぶ会1990

[遺物観察表]

番号	器種	部位	法量(cm) 後 現品	形態・製造の特徴	色調	物質	胎土	備考
1	甕	口縁～ 体部	16.2 16.5	口縁はゆるやかに外上方に立ちあがり、明瞭な巻き目痕を残す。端部は丸くおさめる。端縁は薄い。外面は左～右本／部位のタタキ調整を行なう。内面は2種のハケナデを用い、底端付近はナデ調整を行う。	灰白色	やや軟	長石、角閃石、 約3mmの大砂粒を 含む	
2	甕	口縁～ 体部	16.5 7.0	口縁は鋭く筋筋。外側気味に伸び、端縁は丸い。外面は粗いタタキを施し、内面はハケナデを行う。	淡褐色	良好	金雲母、約4mm大 の砂粒を含む	
3	甕	口縁部	16.8 3.5	「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端縁は角ばっておさめる。外面は細筋のタタキを施す。内面は頭部までヘラケズリを施し、口縁はハケナデの後ナデで擦り消している。	暗褐色	良好	金雲母、角閃石を 多く含む	スス付着
4	甕	口縁部	17.6 4.3	「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端縁は大きくなま上げる。端縁は薄い。外面は細筋のタタキを施す。内面は頭部までヘラケズリを行なう。	暗褐色	良好	金雲母、角閃石、 長石を多く含む	
5	甕	口縁部	17.0 3.5	「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端縁はやや角張っておさめる。外面はタタキを施し、内面は頭部までヘラケズリを行なう。	暗褐色	良好	金雲母、角閃石を 多く含む	
6	甕	口縁部	16.4 5.8	「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端縁は小さくなま上げる。外面は端縁まで細筋のタタキを施す。内面は頭部までヘラケズリを行なう。	暗茶褐色	普通	金雲母、角閃石、 長石を多く含む	
7	甕	完形	14.8 22.8	最大径が体部の半位にあり、「く」は字状に屈曲する口縁をもち、端縁は小さくつまみ上げる。底部は尖り底、外面はハケ調整、頭部～口縁にかけてはロコナデ、内面は頭部までヘラケズリ、口縁はハケナデ。	外面淡茶褐色 内面深茶褐色	普通	金雲母、角閃石、 長石を多く含む	一部スス付着
8	甕	口縁～ 体部	15.4 20.0	ほぼ球形に近い体部を示し、口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は小さくつまみ上げる。外面はハケナデを施し、内面はヘラケズリを行い、頭部よりや下までユビナデを行なう。	暗茶褐色	普通	金雲母、角閃石、 長石を多く含む	一部スス付着
9	甕	口縁部	17.2 4.7	「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端縁は小さくなま上げる。端縁はハケナデ、内面はロコナデ。	暗茶褐色	良好	角閃石、雲母、長 石を含む	スス付着
10	甕	口縁部	16.4 6.2	「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端縁は小さくなま上げる。外面はハケナデ、内面はロコナデ。	茶褐色	普通	金雲母、角閃石を 含む	
11	甕	口縁～ 体部	15.0 14.4	「く」の字状に屈曲する口縁をもち、端縁は大きくなま上げる。外面は横方向のハケナデを行なった後、底へを一間に施す。内面はロコナデ。	淡茶褐色	やや軟	角閃石、金雲母、 長石を含む	
12	甕	口縁～ 体部	15.0 4.8	上の方へ内側で伸びて屈曲、端縁はナデ調整を行ない、外上方に肥厚する。頭部内面は頭部までヘラケズリを行なう。	淡乳白色	普通	角閃石、金雲母を 含む	
13	甕	口縁～ 体部	17.2 17.3	最大径は、中位よりやや下にあり、口縁は「く」の字状に屈曲する。端部角は端縁に凹窓をもつ。外面は左上よりの深い、タタキを作った後、左上がりのハケナデを用いる。内面は頭部までヘラケズリを行なう。一部ナデにより擦り消す。	淡灰白色	やや軟	金雲母、長石、 約2mmの大砂粒を 多く含む	

番号	形態	部位	法量(cm) 規則	形態・開幕の特徴	色調	構成	鉱土	備考	
14	葉	口縁～ 体部	15.6 20.0	ほぼ球形に近い体部を呈し、口縁は輻 く屈曲し、外上方にやや内湾気味に伸びる。端部は肥厚して面をもつ。体部 外側はハケナデ、内面は底部下までヘ ラケズリを行う。	淡灰褐色	普通	金雲母、角閃石、 φ 4 mmの砂粒を含む	一部スス付着	
15	葉	口縁～ 体部	14.0	12.4	乳褐色	普通	金雲母、角閃石、 長石より 1 mm 大の砂 粒を含む		
16	葉	口縁～ 体部	18.8 9.5	七内方へ内湾して伸びる体部からは輻 く屈曲し、端部は内方に肥厚し、水平な 面をもつ。体部外側は端部よりやや下 にハケナデ、口縁はハケナデをナデで 覆り出す。内面は底部までヘラケズリ	淡茶褐色	普通	金雲母、角閃石、 長石、石英より 2 mm 大の砂粒を含む		
17	葉	口縁～ 体部	16.4	12.0	上内方へ内湾して伸びる体部から口縁 は輻く屈曲し、端部は内方に肥厚する 外側は端部より下でハケナデを行 う。端部よりやや下に砂粒を施す。内面は 端部よりやや下にヘラケズリを行う。	淡茶褐色	普通	長石、角閃石、φ 1 mm 大の砂粒を含む	
18	葉	口縁～ 体部	12.0	6.5	上内方へ内湾気味に伸びて、輻く屈曲 し、口縁は上内方へ内湾して伸びる 端部は内方に肥厚して内傾する面をも つ。外側の開闊部はやや内湾気味に、端 部よりやや下に砂粒を施す。内面は 下に砂粒を施す。内面はヘラケズリ	暗褐色	やや軟	φ 1 mm 大の砂粒を 含む	
19	葉	口縁～ 体部	11.6	6.8	上内方へ内湾しながら伸び、丸く屈曲 して、口縁端部は丸くおさめる。体部 外側横方向のヘラミガキが施され、内 面はヘラケズリ、端部付近は指頭窓が 残る。	淡褐色	普通	φ 2 mm 大の砂粒を 含む	スス付着
20	葉	口縁部	11.7	4.2	上内方へ内湾気味に伸びて、屈曲し口 縁端部は丸くおさめる。外側はハケメ 開闊、内角は端部附近に指頭窓が残る	淡褐色	普通	φ 1 mm 大の砂粒を 含む	スス付着
21	小型 丸底 葉	口縁～ 体部	8.0	7.7	球形の体部から屈曲し、ほぼ直上へ伸 びて、口縁部にいたる。端部は肥厚する。 外側はハケナデ開闊の後にユビナデを行 う。内面は体部上半はナデ、下半は ハケナデが残る。	淡褐色	普通	φ 2 mm 大の砂粒を 含む	
22	小型 丸底 葉	口縁～ 体部	11.4	10.1	球形の体部から屈曲し、外上方へ まっすぐ伸びる。口縁端部は丸い。体 部外側をヘラミガキし、内面はイタ ナデ。口縁はナデ	淡茶褐色	普通	金雲母、長石、角 閃石、φ 1 mm 大の 砂粒を含む	
23	複合 口縁 葉	口縁～ 体部	12.2	6.5	上内方へ内湾気味に伸びて屈曲し、上 外側へ丸く伸びて新月形、やや外湾氣 味に直立し、口縁端部は丸くおさめる 外側にヘラミガキを施し内面口縁部に 横方向のハケメを施す。	淡茶褐色	やや軟	長石、石英、φ 1 mm 大の砂粒を含む	山陰系
24	小丸 丸底 葉	完形	10.3	6.5	半球形の体部から屈曲し、外方へ丸く 伸びる。口縁端部はやや丸い。外側体 部はナデを施し、底端付近はヘラケズ リが残る。口縁部は横方向のハケナデ を行う。内面は、体部はヘラケズリ。 イタナデを行い、口縁部には横方向の ハケナデを施す。	灰茶褐色	良好	角閃石、金雲母、 長石、石英、φ 1 mm 大の砂粒を含む	
25	林	体部～ 底部		5.8	凹面を持ち、半球形の体部から屈曲す る内外面ともにヘラミガキを行う。	淡灰色	良好	黒雲母、角閃石、 長石、石英を多く 含む	体部外縁に赤色顔 料を施す。
26	有段 葉	完形	14.6	4.9	半球形の体部から外上方へ二段に屈曲す る口縁をもつ。内外面に密にヘラミ ガキを施す。	淡褐色	普通	精良	

番号	種類	部位	法量(cm) 高さ	形態・調整の特徴	色調	地成	地土	備考
27	有段 林	完形	15.6	5.5 外表面はココナデ後へラミガキ、内部はヘラケズリの後へラミガキを施す。内部は常にヘラミガキを行なう。	淡茶褐色	普通	精良	
28	有段 林	完形	14.8	5.3 外表面はヘラミガキを密に施すが、底部に若干イクナデがある。内部は全体にヘラミガキを施し、口縫部はユビナデを行う。	赤褐色	やや軟	良、金型母、φ4 mmの大砂粒をわず かに含む	
29	有段 林	完形	13.7	4.7 内外面ともにヘラミガキを施すが、外 面に若干ヘラケズリがある。	淡茶褐色	良好	精良	
30	高杯	杯部		5.3 二段に開出し、上方へ伸びて口縫部 にいたる。外表面は横方向へラミガキ を施し、内部は横方向へラミガキの 裏に放射線状のヘラミガキを施す。	淡茶褐色	普通	精良	
31	小型 器台	完形	9.8	7.4 円錐形の受部と脚部とかなり、共に 直角的に内に開く。受部と脚部とは貫 通している外表面はヘラミガキで一部に ハケめられる。内部、受部はヘラミ ガキ、脚部はイクナデを行う。	乳褐色	良好	精良	
32	小型 器台	完形	9.4	8.0 組形の受け部を有し、口縫部はやや外 気味に直立する。脚部は直立的に大き く外に向く。外表面はヘラミガキを密に 施し、一部に輻方向のハケめが含まれ る。内部は脚部はヘラミガキ、脚部は ハケナデを行う。	淡茶褐色	普通	精良	3孔を穿つ
33	臺	底部	底径 4.4	3.0 半球から外上方へ内消気味に伸びる。 外表面はタキナデ調整、内部はイクナデを 行なう。	淡灰白色	良好	φ2mmの大砂粒を 含む	SX-01
34	臺	完形	13.2	23.0 尖り底をもつ球形の体部から屈曲し、 口縫部は上外方にへ伸びる。体部外表面はタ キナデ調整の後にヘラミガキ、内部は下 半はハケ調整をし、上半はていねいな ナデを行う。	淡灰白色	良好	石英、長石、角閃 石、雲母、φ6mm 大の砂粒を含む	スス付着 SX-01
35	小型 丸底 臺	完形	11.6	7.9 半球形の体部から屈曲し、口縫部は上外 方にへ伸びる。口縫部は直立にはば等 しい。脚部は不明だが、内部底部にわ ずかにイクナデが含まれる。	淡茶褐色	良好	φ3mmの大砂粒を 多く含む	SX-01
36	臺	口縫部	18.0	3.2 「く」の字形に組曲する脚部から外上方 へ伸びる口縫部を有し、脚部はつまみ上 げる。内部は脚部までヘラケズリ	淡灰白色	普通	金雲母、角閃石、 φ1mmの大砂粒を 含む	暗緑灰色粘土
37	複合 口縫 臺	口縫部	21.6	8.9 上外方へ内消気味に伸びて屈曲し、上 外方へ伸びた後屈曲し、上外方へ内消 気味に伸び脚部に至る。外表面はハケ を施した後にナデを行い、内部は脚部 より下でハケが含まれる。	淡灰白色	やや軟	φ2mmの大砂粒を 多量に含む	暗緑灰色粘土 稍液系
38	複合 口縫 臺	口縫部	19.2	3.8 外反しながら外上方に二段に開く口縫 をもつ。内外面にわずかにヘラミガキ が含まれる。	淡灰褐色	良好	φ2mmの大砂粒を 含む	暗緑灰色粘土

17. 中田遺跡 (92-467)の調査

1. 調査地

中田2丁目405番地

2. 調査期間

平成4年11月27日

3. 調査契機

マンション建設

4. 調査方法

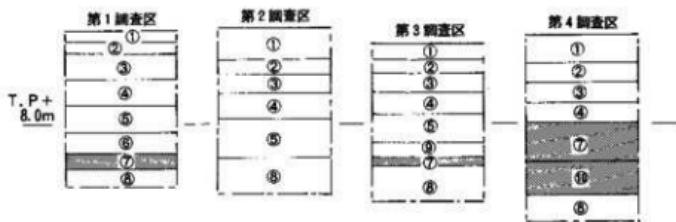
マンション建設用地に 2.5m×3m の調査区を 3カ所設定し、西から東に向かって第1から第3調査区とした。さらに第1調査区と第2調査区のほぼ真中北よりに 3m×3m の第4調査区を設けた。そして各々の調査区を機械と人力を併用して地表下 1.1~1.4m まで掘削を行った。

5. 調査方法

全調査区において①表土から⑤明灰色砂質土までは同様の地層の堆積を示している。以下、第1~3調査区では地表下 0.8m~0.85m (TP + 7.8m~7.75m) にみられる⑦暗紫灰色粘質土層で古墳時代初頭の遺物が出土している。いずれの調査区においても湧水層の⑧灰白色細砂層の上部に位置しているが、いずれの調査区においても湧水層の⑧灰白色細砂層の上部に位置しているが、⑧層には暗紫灰色粘層土がブロック状に入り込み、遺構面になる可能性もあるが湧水がひどく確認できなかっ

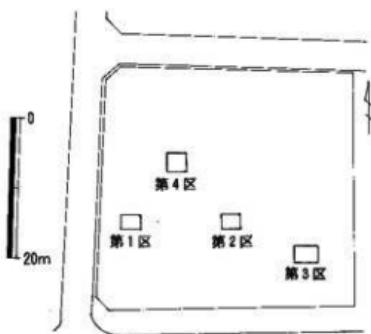


第71図 調査地周辺図 (1/5000)



第72図 基本層序模式図 (1/40)

- | | |
|-------------|---------------|
| ① 表土 | ⑥ 青色粘質土 |
| ② 旧耕作土 | ⑦ 暗紫灰色粘質土 |
| ③ 灰色砂質土(Fe) | ⑧ 灰白色細砂 |
| ④ 灰色粘砂(Fe) | ⑨ 淡褐色粘砂 |
| ⑤ 明灰色砂質土 | ⑩ 深褐色班灰色砂質シルト |



第73図 調査区設定図 (1/800)

た。またそのために明確に分離しえなかつたが、⑦～⑩層で弥生時代末期の遺物が出土している。さらに第3調査区においてのみみられた⑩淡褐色粘砂層では若干の瓦器碗、土師皿の破片が出土している。

第4調査区は他の調査区と異なって層序を示す。⑦暗紫灰色粘質土は地表下0.65m (T.P. + 8.0m) でみられ、約0.28mの厚さで堆積している。この下部には第4調査区においてのみ確認できた⑩褐色班灰色砂質シルトが約0.23mの厚さで堆積している。いずれも弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての遺物包含層である。⑩層より下ではやはり⑧層がみられ甕、高杯、器台等が出土した。

6. 備考

本調査地の北西部分に接する道路で行った当教育委員会が平成3年度に実施した下水道工事に伴う調査でも同時期の遺物が多数出土しているが、今回の調査ではそれがさらに南に拡がることが確認できた。

(道)

図版



第1次調査 溝検出状況



第2次調査 土坑状遺構断面



調査地全景（東より）



1号墳調査前全景（南東より）



1号墳石室調査前（北西より）



2号墳石室調査前（北東より）



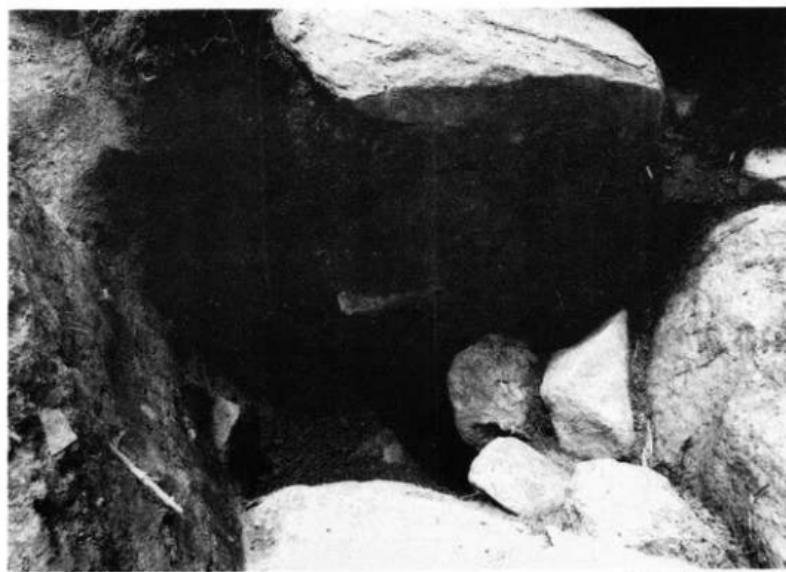
1号墳石室調査後（南西より）



1号墳石室全景（東より）



1号墳石室右側壁



石室周辺確認西側ピット



1号墳北側トレンチ



1号墳東側トレンチ



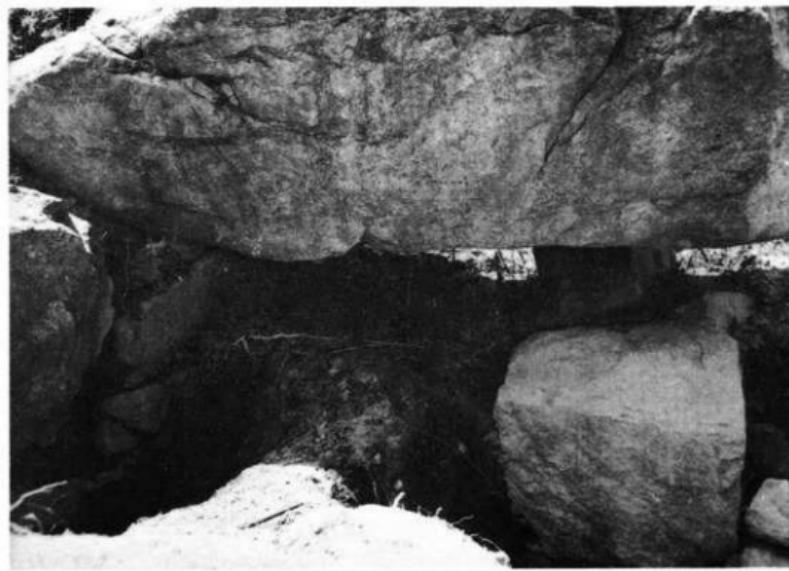
直交トレンチ



直交トレンチ・南トレンチ



2号墳石室全景（北東より）



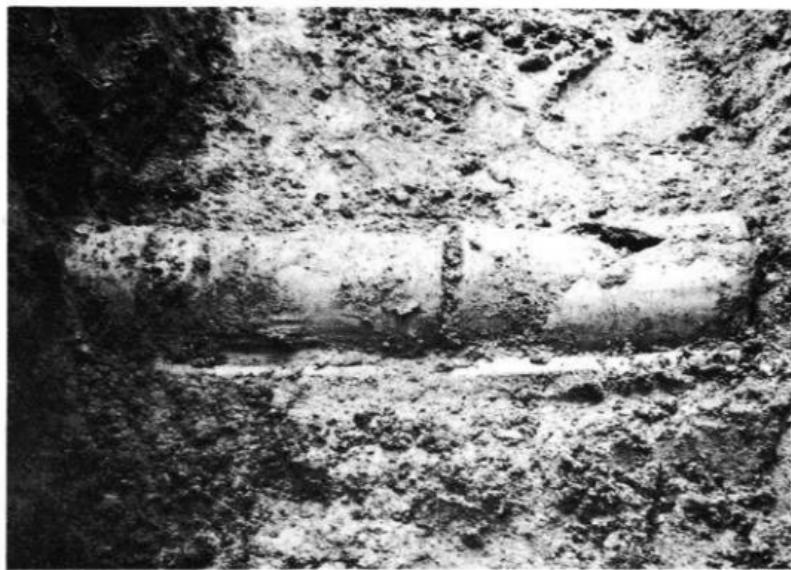
2号墳石室羨道部



2号墳東トレンチ



1号墳調査風景



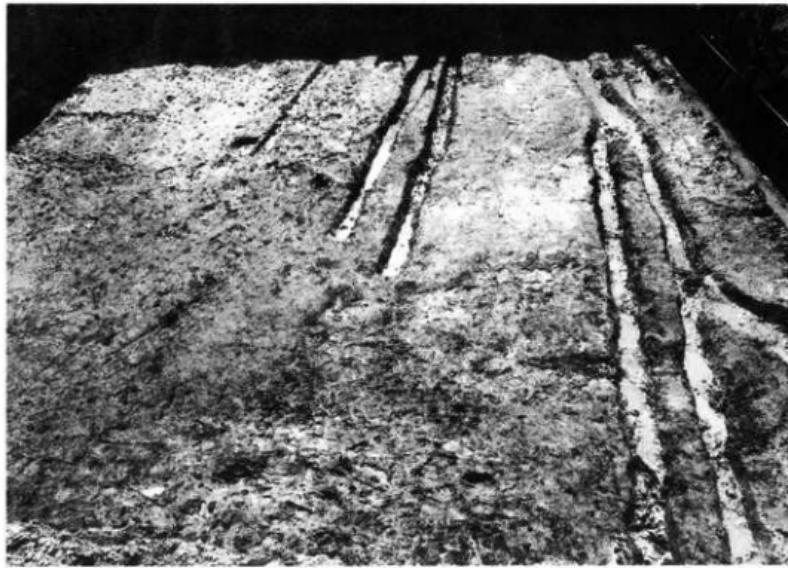
近世・瓦導管



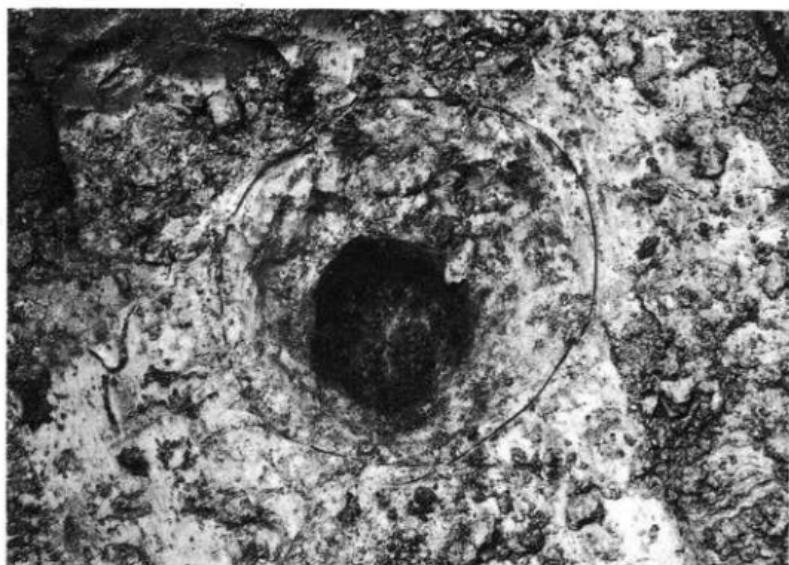
古墳時代・土坑



調査風景



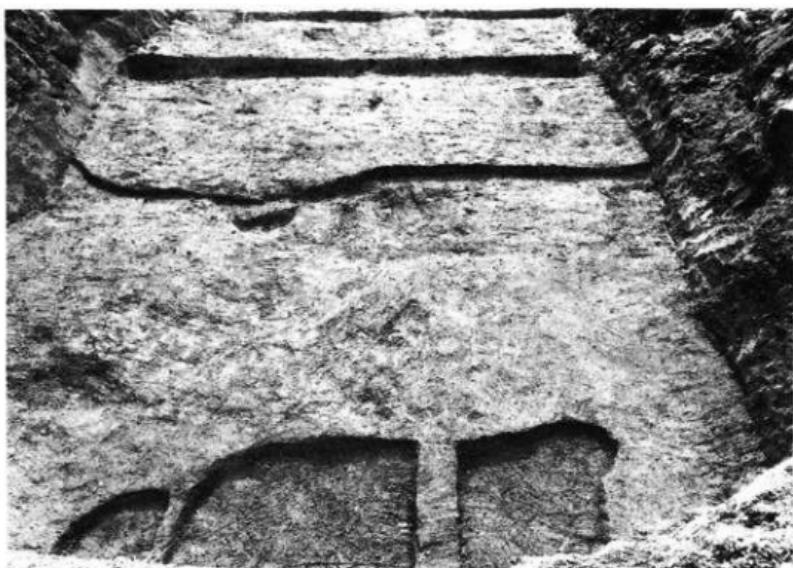
調査区全景（東から）



第1調査区 ピット1



第1調査区 溝内ピット



第2次調査



第2次調査 ピット(断面)



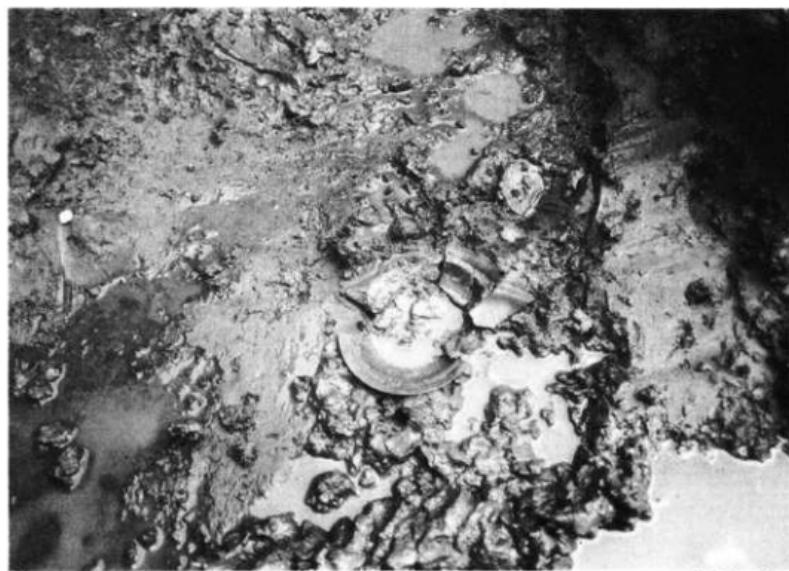
第1調査区 潟



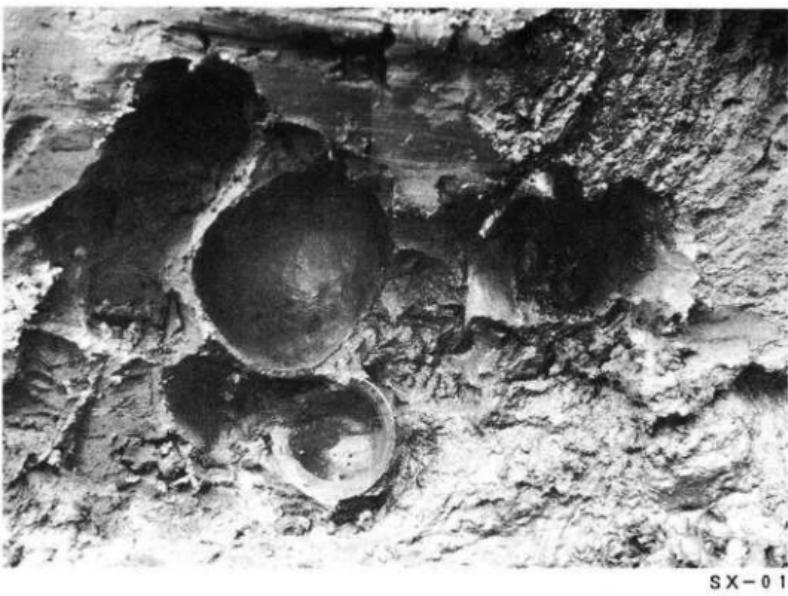
第2調査区 土坑

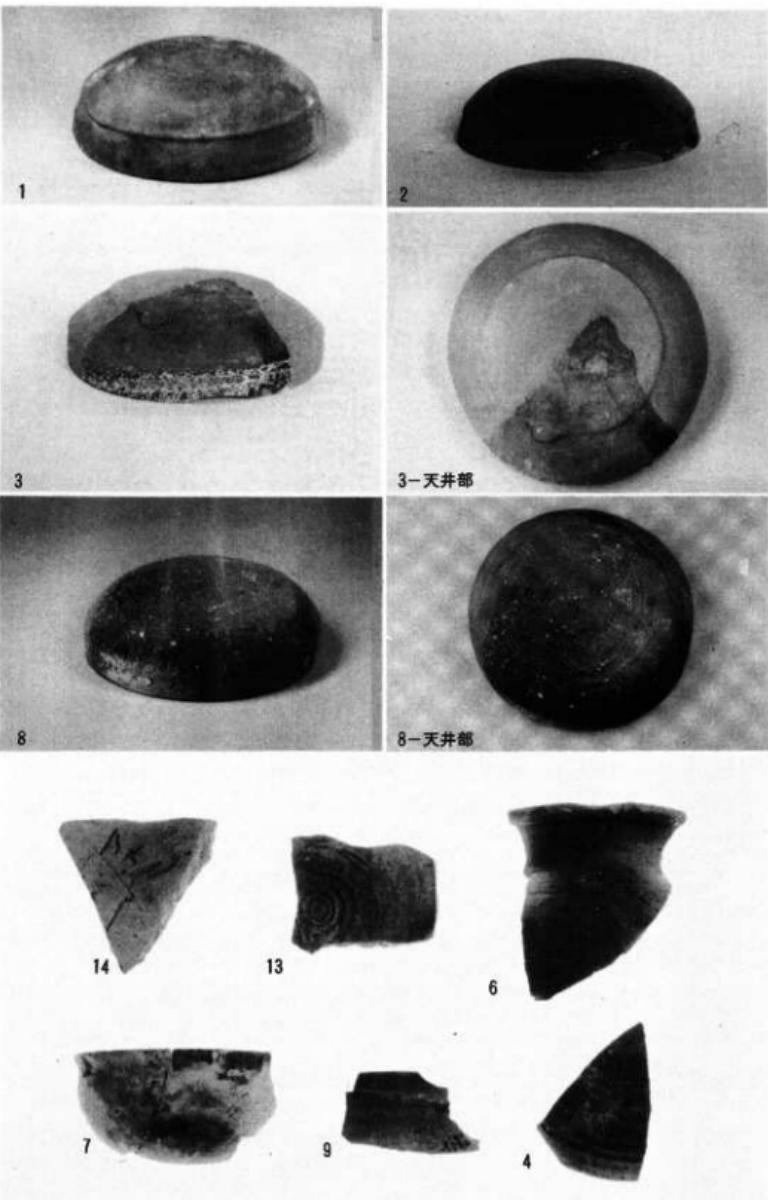


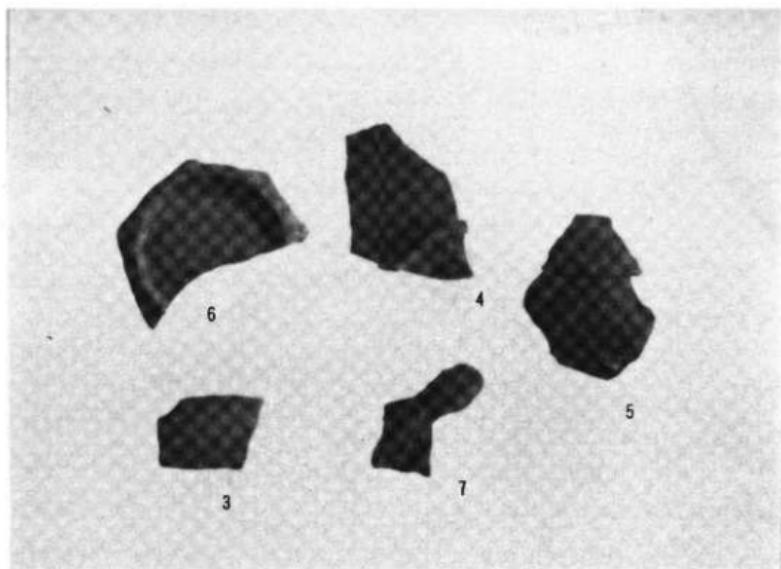
井戸



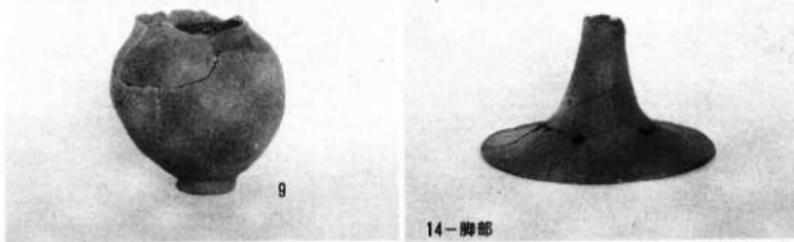
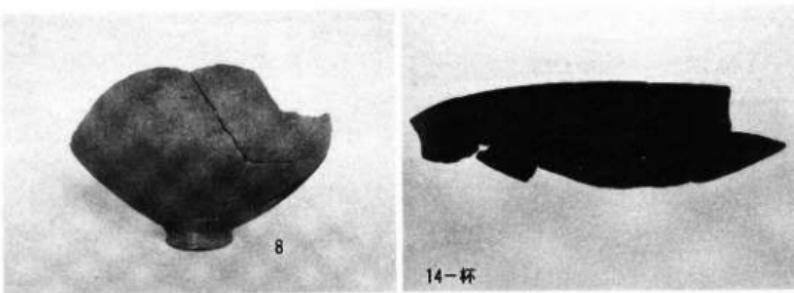
土器出土状況



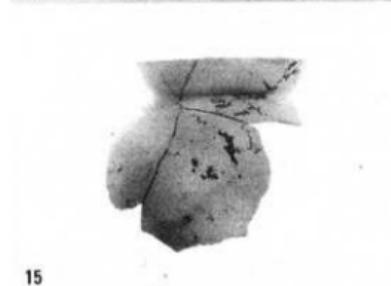
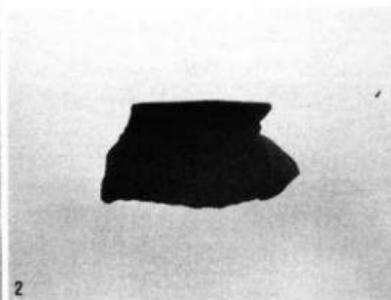




包含層出土遺物

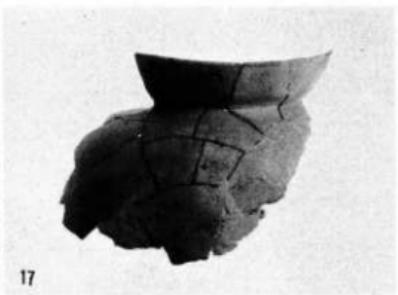


土坑出土遺物





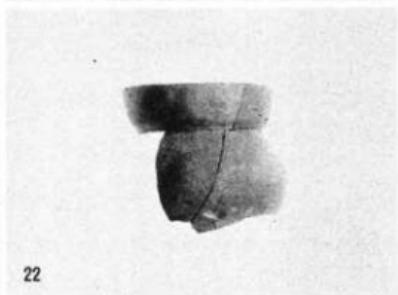
16



17



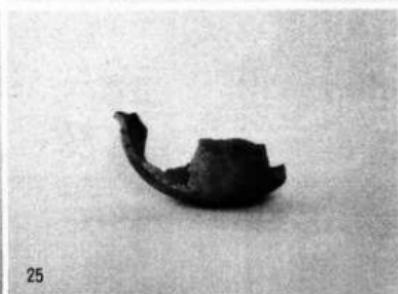
18



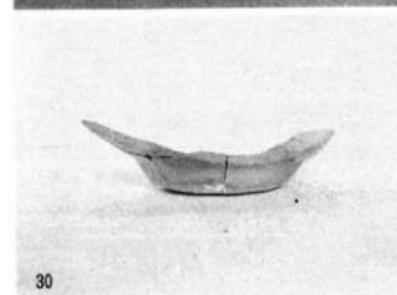
22



24



25



30



37

井戸出土遺物 (e x - 37)



26



27



28



29



31



32

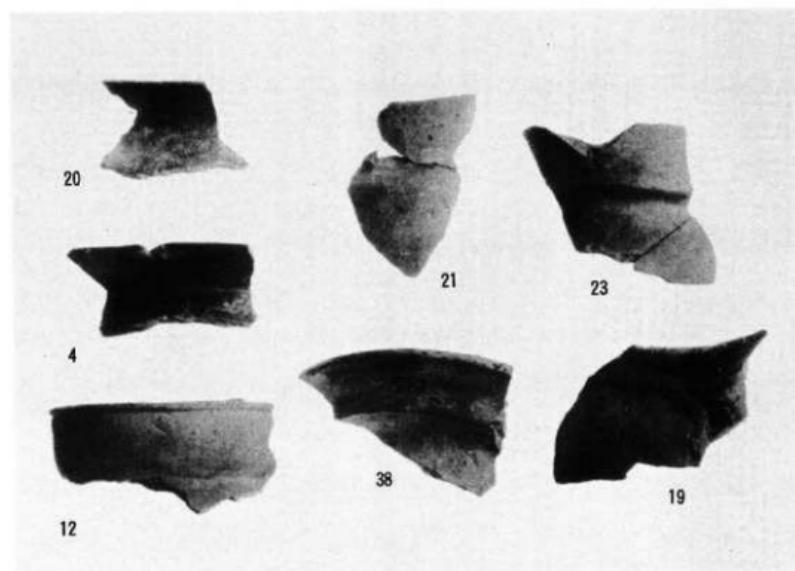


34



35

井戸出土遺物 (26~29、31、32) SX-01 (34、35)



井戸出土遺物 (e x - 38)



八尾市文化財調査報告27
平成4年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ

発行日 1993年3月

発行所 八尾市教育委員会

印刷 倍近畿出版印刷

